

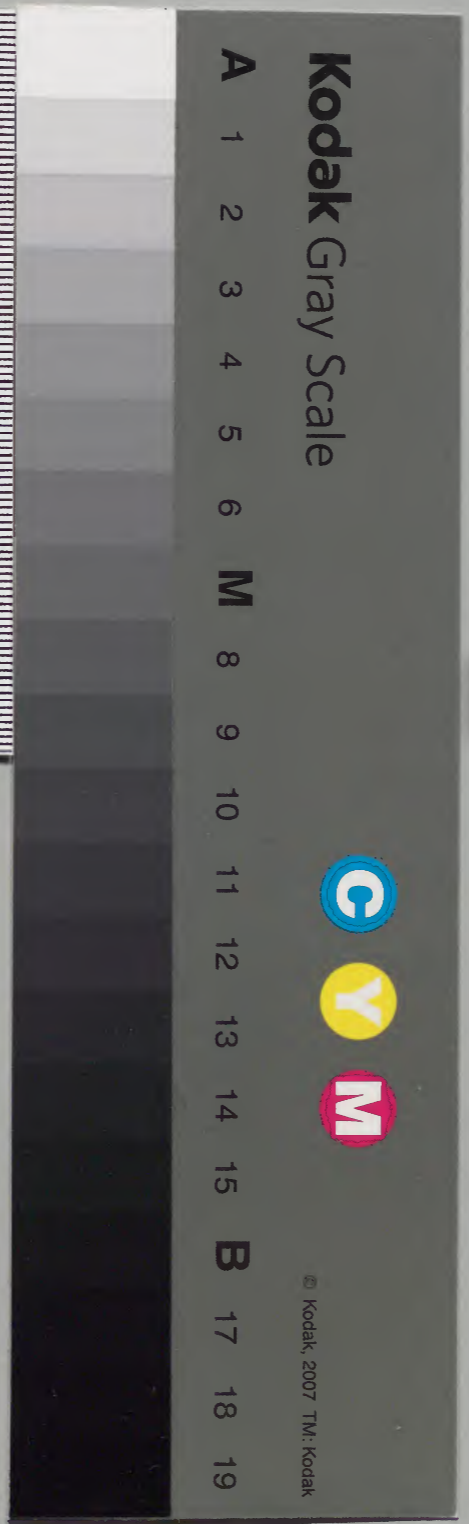
江戸名所圖會 十八

農商務省
農商部
圖書
第 共
號 冊

大政官文庫
和書門
一三七八
二一七
二〇九
冊 函 類

内閣文庫
和書類
二三七八
二〇九
七四函
冊 架

内閣文庫	
番號	和 11387
冊數	19 (17)
函號	174 31



江戸名所圖會卷之七

揺光之部 目錄

富賀岡八幡宮

洲邊女天

海福寺

本誓寺

六本松

六間屋神明宮

圓光院

猿江泉養寺蓮

三所堂

徳園社

八月十六日祭礼

砂村元八幡宮

採茶庵萬壽

一蝶寺

源八幡宮

源八幡宮

源八幡宮

源八幡宮

源八幡宮

源八幡宮

源八幡宮

源八幡宮

二十之間堂

陽嶽寺

靈巖寺

芭蕉庵舊址

一之指辨成天洞

源八幡宮

源八幡宮

源八幡宮

源八幡宮

源八幡宮

源八幡宮

入神の文

入神の文

入神の文

入神の文

入神の文

入神の文

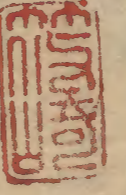
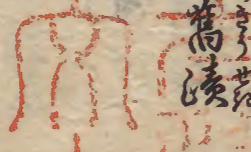
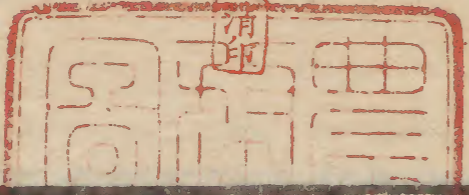
入神の文

入神の文

入神の文

入神の文

入神の文



東覚寺 新神宮

香取太神宮

寶蓮寺

常光寺

慈光院

若孀撞現社

神木相生樟

陸奥太子堂

秋寺庭中の島

柳崎妙見堂

押上最教寺

蒙古退治日丸丸屋曼荼羅縁起英島

法恩寺 番神堂

大法寺 番神堂

靈山寺 番神堂

第六天祠

中の郷尾匠の島

業平天神社

本久寺

多田薬師堂

遠州秋葉山若寺

牛流神の文

さくら井

妙源寺

最勝寺

牛流神の文

太子堂

大川橋の圖

三圍稻荷社

牛流神王子撞現社

寺崎蓮華寺

長命寺

請地秋葉撞現寺

福寺

寺崎蓮華寺

白盤の神社

隅田河

須田の河系

隅田河堤

隅田の宿

鄰寺

本母寺

梅若丸塚

牛田薬師堂

関屋の里

綾瀬川

丹頂池

沼江再光寺

若宮八幡宮

関屋天満文

葛西花田村

本下川薬師堂

清重稻荷社

書研若根之旧跡

古製山葵掛の島

平井聖天宮

葛西六郎墳墓

立石

中川

普賢寺

二の江妙音寺

善通寺

熊野撞現祠

一の江妙音寺

鎌田妙福寺

淨無寺

小糸氏康小齋の島

今井渡

夕顔観音堂

猿ヶ膜

宋又村帝釈天社

彩宿渡に

松戸の津

相摸巻

相摸巻

半田稻荷社

神明宮

辨財天祠

若照寺

小弓曹子墓

神明宮

金別院廢址

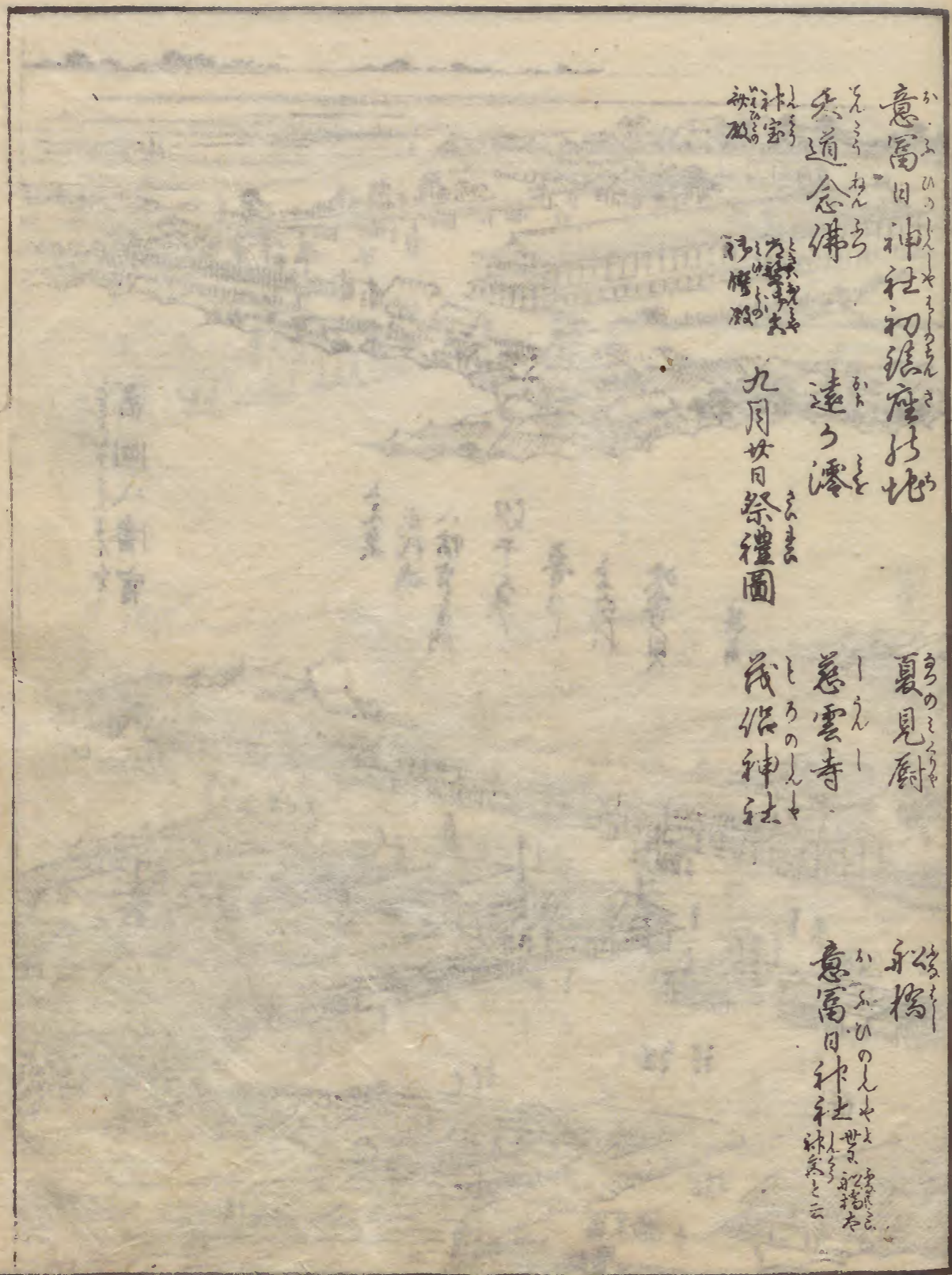
法願寺

法徳八幡宮

神明宮

金別院廢址

法願寺



意富日神社初詣座地
 大道念佛
 九月廿日祭禮圖
 遠く澤

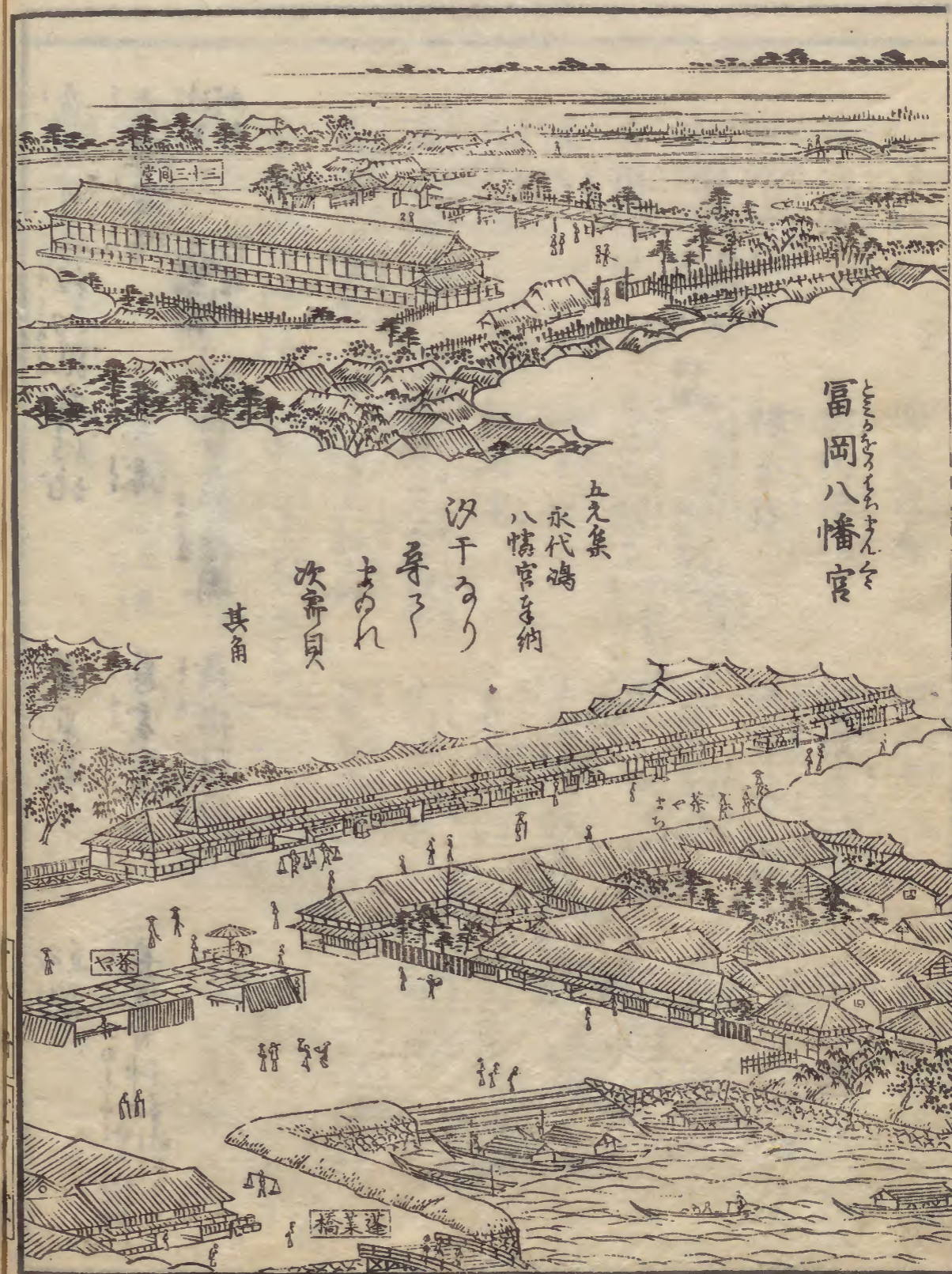
夏見厨
 慈雲寺
 茂信神社

意富日神社
 石茅

長治湊
 市河城址
 圓府臺
 玉府城址
 鏡石
 美沼浦
 真弓橋
 葛飾八幡文
 安房湊神社
 妙正池
 勝沼田池
 同治竈圖
 新利根川
 根本橋
 金光明寺
 持正坂
 美間渡
 美弓子鬼名向所
 八幡不知森
 正中山法華經寺
 妙正大徳神社
 洗川
 甲宮
 迦羅崎起瀬
 總寧寺
 同古戰場
 真間入江
 美間法寺
 真間の井
 葛谷妙見堂
 阿須波神社
 石茅
 圓光大師湊
 市川渡
 鐘ヶ淵
 内宿山
 美弓於湊比
 梨園
 高石神社
 若宮八幡文

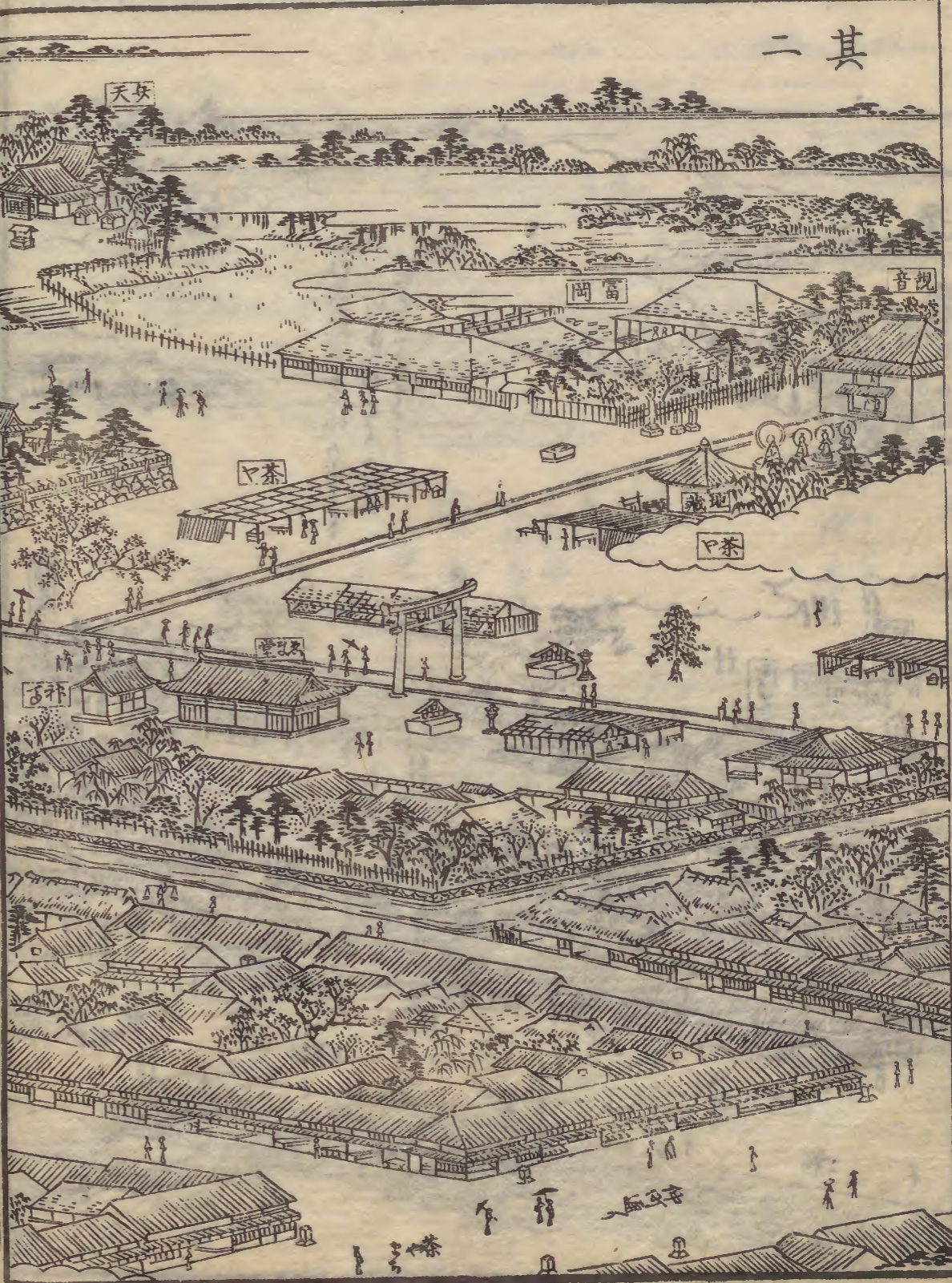


社内柏戸多紀り中にも
二軒茶屋とよりの
ところ一名あり



富岡八幡宮

五元集
永代碇
八幡宮を納
汝干るり
舟子
まのれ
次舟員
其角



其二

三其



五
 とれその
 まつも
 いろそくと
 をさする所代ハ
 ありき代の
 ころ

仁和寺宮



元文戊午夏五月

東都中秘書監源鳳卿子陽甫撰
得水赤井啟拜書

山岡 毎年三月廿日弘法大師の御影供を遊行と此日より同廿八日中々尚社別當永代寺の林泉

糸禮 開年八月十五日又此日神輿三基本所一の櫛の南藏舟浦の前より行祠(神幸同日

尚社に流簡馬をとりむたは假屋敷敷敷をとりて見物と貴徳市をさるは同書よ

當社門前一華表より内二四所り向の西側茶肆酒肉店軒を並へ常小

絃哥のあり絶と殊又社頭より二軒茶屋と称する賃食屋杯あり

遊客絶と牡蠣蜆花蛤鰻鱺魚の類ひを此此の名産とせり

三十二間堂 同所よりあり東の方より相傳寛永年間 或人云永年 大江戸

の弓師備後といふ者射術稽古の爲京師蓮華土院を摸して三十二

間堂を創立せん事を乞依後草よおいて地を賜ひ諸家より勧進

了建立の功を募るる不於同十九年壬午十月普請落成と



永代寺山院

毎年三月廿日より

同廿八日迄のうら
林泉をひいて
備人よえしむ





の四つと今夫崎と字むらひ三三同堂の同地を是つらうその地
 今八町と多れを俗間堂前と唱ふるも三三同堂の地を略す
 田録の災に罹る灰燼なり其後今の地も福させられたりと云ふ
 三三同堂矣教帳よ慈眼大師の發起ありとあり又一説ふむり
 流の武土これを赴き江戸村樹の遠く根葉とあよかをそり不ありとも云ふ

崎 辨財天社 同所東の方 洲崎あり列當を吉祥院と号す本尊
 辨財天女の像弘法大師の作といひ相傳元禄年間深津氏正隆
 台命を奉り八幡宮と云ふ東の方の海濱を築き立り陸地とて依同
 十二年庚辰護持院の大僧正隆光 河辺氏此地は天女の宮居を建立とて

方ありと
 此地の海岸中々佳景あり殊更弥生の潮盡あり都下の貴族袖を連
 る真砂の文蛤を搜り又ハ樓船を浮り妓婦の弦歌よ奥に催
 ともありと云ふ春色を添るの一奇觀たり又冬月千鳥も名をゆり

長光山陽嶽寺 深川富岡橋の北結横小路あり妙心寺流の禪宗よ
 一々本尊観音大士の像ハ惠公僧都の作ありと云向井氏忠務用

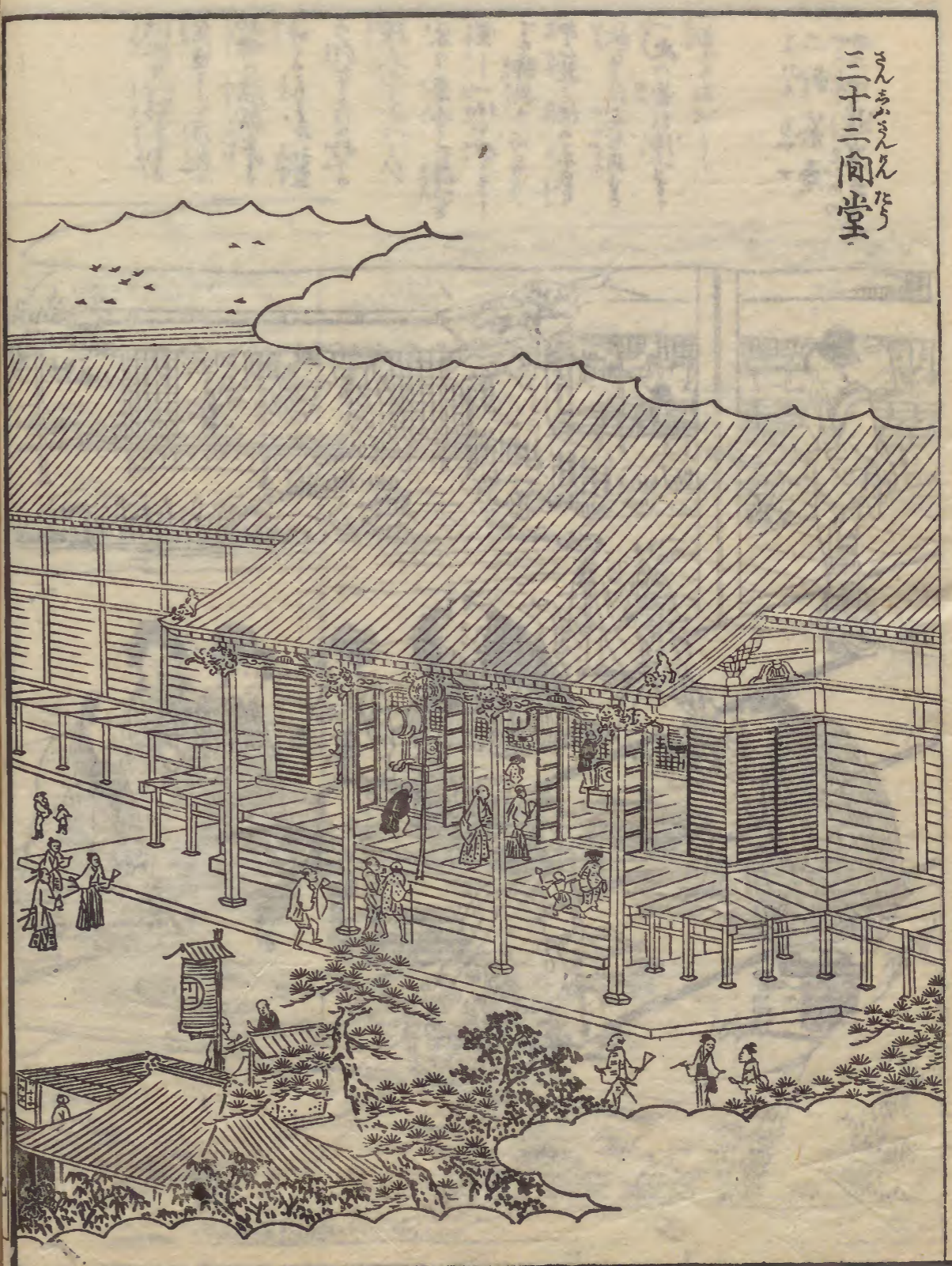
二軒茶屋
雪中遊宴之景

このち
け他々
佳境
四時の
中
の
人
米
賞
了
冬
秋
一
解





五え集
 新三十三間
 若草や
 ここのの
 茶え
 本綿
 うま
 其角



三十三間堂
 三十三間堂



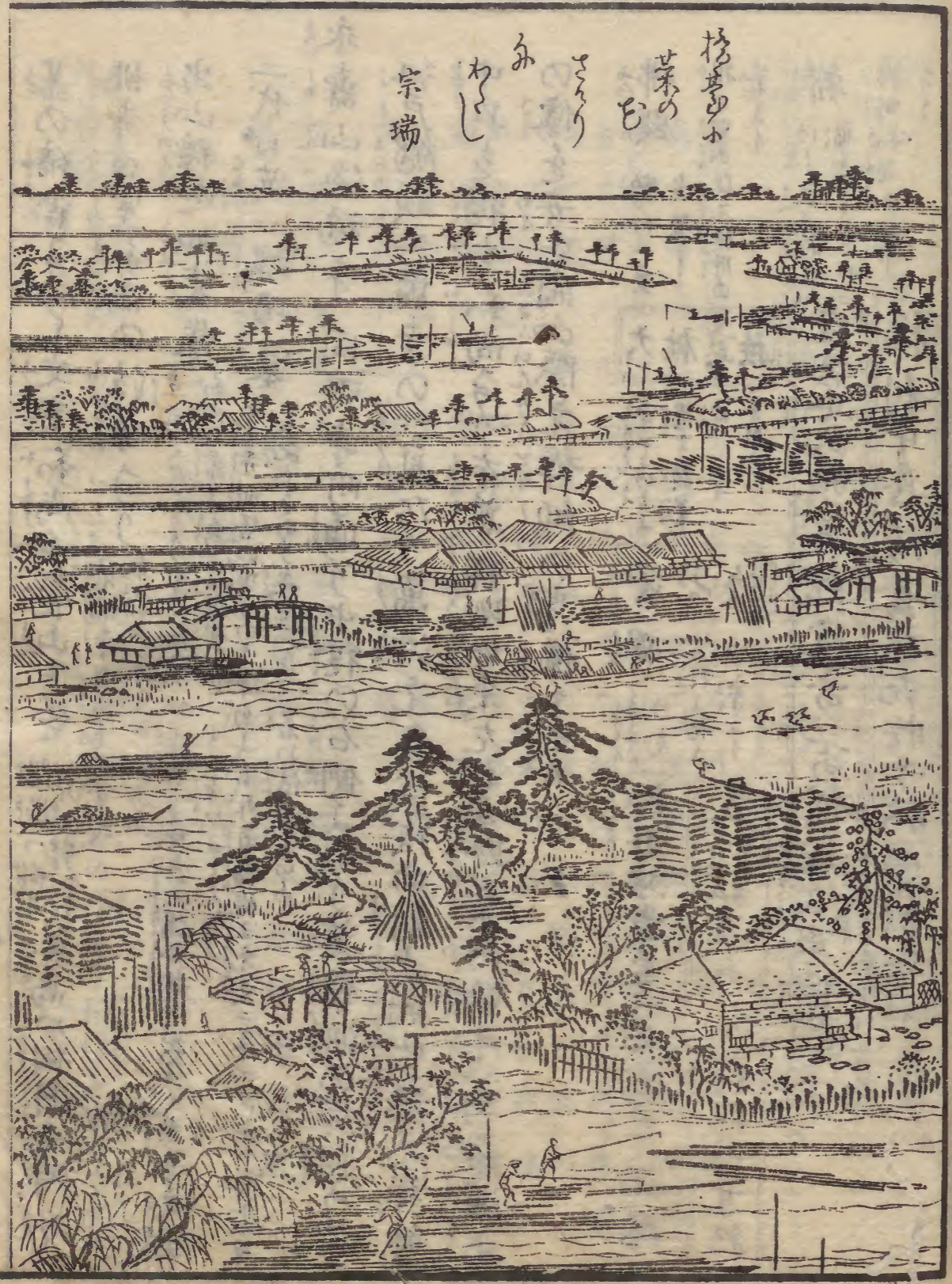


此
多竹

砂村
富岡元八幡宮
洲崎安天
十八丁の東
の海濱の
浜川八幡宮の
旧地あり



此
多竹

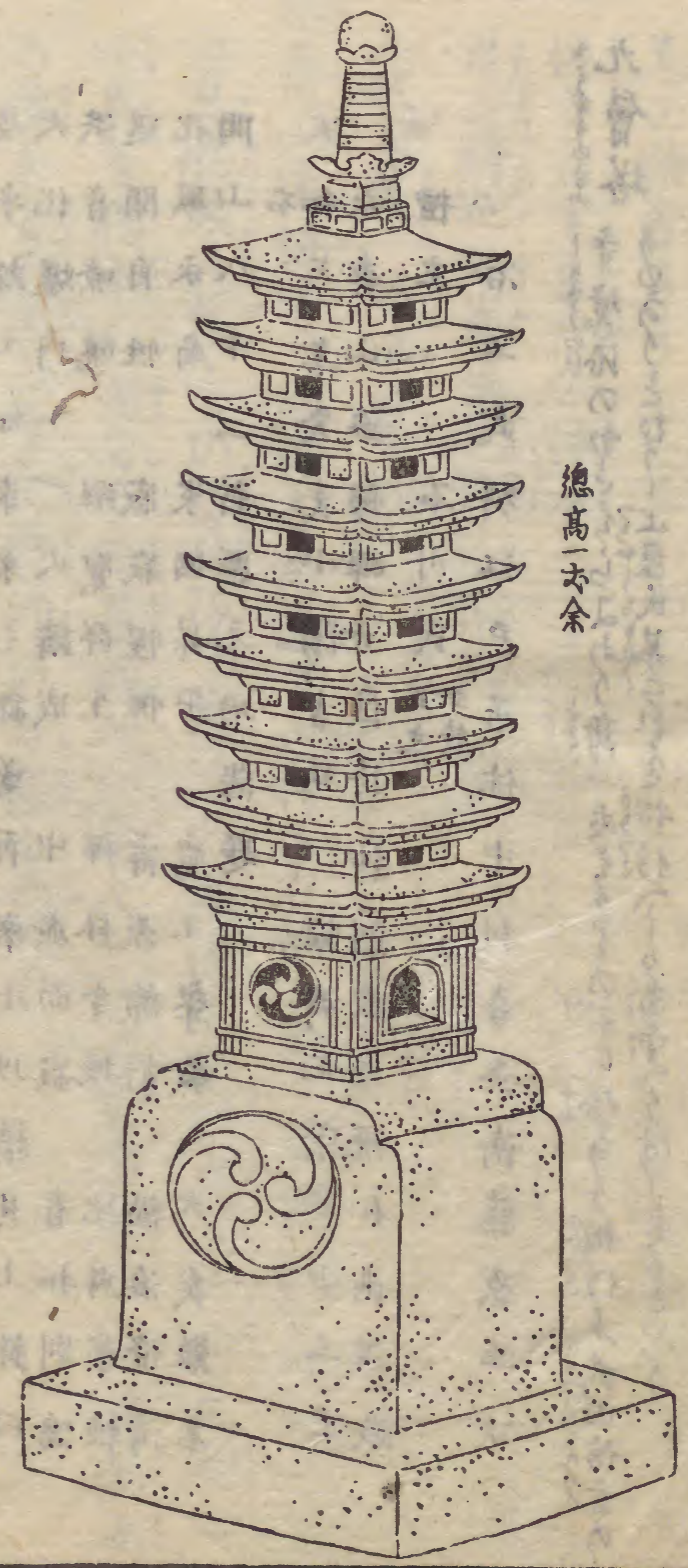


杉並小
菜の
むらり
あ
わじ
宗瑞



深川
木場

總高一丈余



採茶庵舊蹟 同所平野所より能諧師杖風子の庵室より杖風本圃の
 参別より杖山氏より鯉屋と唱へ大江戸の小田原所より住て眞售たり
 後隠栖一と一元と号と 裏翁蓑杖 常より能諧を好む檀林風を慕ひ
 のら芭蕉翁杖師とて此筵と遊み夏元六十年翁常より與せらる
 云く去来ハ西三十二箇圃杖風の東三十二箇圃の能諧奉行あり

と杖の芭蕉庵の事あり詳あり享保十七年壬子六月十二日八十六歳とて没せり西本教寺の中蔵に
 杖と
 杖風の集 予爾若採茶庵をわかれ後
 秋を杖をうらうらと秋の風あり
 杖のたよりちゆへ

向家もちほはぬ杖乃ち後とてり南

杖うらうらひとてりえとてり南

深川の月も時雨ふ長くつゆのつゆ

川の音の起野とてり

法苑山浄公寺 同一通より正覺寺橋より北の方右側より日蓮宗甲斐文
 圃才延山は屬とてり身延山の弘通所と称せり萬治元年戌戌創建の
 寺院より圃山の通遠院日義上人と号と中興ハ覺成院日念上人
 たる本尊は釋迦如來の像を安と



海福寺
 武田信玄の
 持つてた
 石の塔
 臺基
 堂前池の
 傍に
 あり

祖師堂 本堂の左にあり 七面堂 日蓮上人の像をまつ 日蓮上人の像をまつ

相傳當寺の淨公院殿妙秀大師の菩提を弔いせめりんる御建

立あり一精舎ありと當時淨公尼の小堀正一入道宗甫の妾あり

寛永十八年辛巳 大樹 御誕生あり頃正一入道の忠公を

補ふの一分は備んと春日の局は物と 御乳母とあり

大樹を育しなる故に淨公尼卒すの後も猶生弟の勤勞公思召出

され萬治元年戌戌當寺境内若干の地を封じ又堂舎經

營の料として大に資財を喜捨しあり日義上人をして當寺尼山

たらしむ乃淨公尼の遺廟を建又香燭の料として同二年庚子寺

産を附せりしとあり 尚寺の境内に阿彌陀如來像の母堂加藤主計政清の息女蓮成院

道奉山靈巖寺 一北に隣る淨土宗園東十八檀林の一室して宏社

梵刹ありと奉尊の阿彌陀如來用山の靈巖和尚たり 和尚諱の松風檀蓮社

傳は姓の里見氏南総小糸の産なり十三代同縣青龍寺の秀岩師の室に入り利深と其性明敏なり

天狗の徒費の人或云後列府中の表姓は今川氏源津淨運院尼の 台首よりして

寺産を附せりる寮舎僧坊堂を連結し巍然たる正え坊り造立

せり銅像の地をその大江戸六地所の一負ありと総門の内正面

對し毎歲四月朔日より同日とて阿彌陀經千部讀誦修行あり

相傳寛永年間當寺開山靈巖和尚或曰大江戸の東諸を顧て侍

者謂て云く我大藍を此地に建じ侍者の云く江潮浪高く鉢

盂底空し畢巨楹碩梁を架せん師笑云く俟夫日わらん於是師

化疏を筆し諸檀家を勸勵し一簣毎に十念して脈譜成結縁する

ら故小四輩競靡廣汀日あらとて陸地とある 今靈巖嶋と稱する其地也 其地早く

成て梵刹を用創し靈巖寺と号せりとて於て學資五十石をある

爾法幢盛り起て五百の義龍恒に蟠る若くは河山和尚の世 尚寺第三世

相蓮社大僧

明曆丁酉の回録に罹りて悉灰燼とあるの後今の地は後

ころとあり其頃の今の地も海濱ありて輒寺院構営ありあり

ありて成阿碩和尚河山和尚の才ありて興澤九品佛の完基と十方を勧進して地を築固り諸

堂成建立せりといふとあり

當知山本誓寺 重願院と号と相通りの向例あり浄土宗江戸四

箇寺の一負たす京師知恩院に属せり唐佛の阿弥陀如来を本尊とと

相傳此本尊の相別小田原の漁者其名を魚網を沈して彼地の海中

小得て後靈示ありて當寺よ安しとありて當寺往古小田原

ありて傳蓮社曜誓阿和尙阿和の北総飯沼弘経寺の尊二世創建一藤枝氏岡基の

浄舎ありて文禄四年丁未 嚴命よ依寺を大江戸よ移せ其

貞蓮社大譽上人文賀和尚中興の開祖とあり

其後馬喰町の辺りて地を賜ひて

水戸中納言頼房卿の浄母堂英勝院殿當寺を被造りあり

浄舎ありて

一蝶寺 同阿東の方海辺新田藪の内より京師妙公寺沈の禪

宗蒼龍山宣愛寺と号と元禄七年甲戌創建の梵園より卓禪

和尚用山たり英一蝶翁曾當寺よ寓居と其頃の遊とて佛殿僧房

等の屏障悉く翁の畫あり故よ世俗一蝶寺と号と

日照山法禪寺 同阿南の小路あり浄土宗より京師知恩院よ属と

本寺阿弥陀如来の像の佛工安阿弥の作あり

菩薩の像の雲中よ羅列して常より行者を護念し湯山の躰粧

を撰擬と

阿上人と号と

濃列惠那郡粕塚の住人俗姓ハ伊賀氏

弘治元年乙卯粕塚よ

伊賀守門佐則吉の

二男あり後伊賀守小政

一城を築きた江田の城と号けり（一）又居住（二）

後上家して駿別（三）に至ると中嶋と云也（四）閑居を（五）あゆ（六）多良庵（七）

と号け雲碩と改めて浄業を修行（八）り（九）多良庵（十）天正十八年関東

御打入の頃道德殊勝の守（十一）ある派以大江戸（十二）召れ品川（十三）とひて寺

境を賜（十四）其後文禄二年癸巳道三河岸（十五）移され又柳屋

地を習せられたり（十六）終つて天和三年（十七）至りて今の地（十八）より（十九）

内城田（二十）のり一頃（二十一）正月二三日の間（二十二）のり（二十三）鉦鼓を鳴（二十四）り（二十五）

龍徳山雲光院 光巖教寺と号と同所西隣る浄土宗江戸四箇

寺の一あり本寺阿弥陀如来の像（二十六）京師東山獅子谷忍叡上人

の作といふ閑山の還蓮社（二十七）住持上人潮吞和尚と号と

本願阿茶局あり（二十八）甲列武田家の臣飯田流後者の孫同久左衛門某の女（二十九）

同刑殺少輔局あり（三十）後（三十一）後列今川氏義元の士神尾孫久満久宗の室とあり

女御 入内の時供奉の功（三十二）より後一位（三十三）叙せらる當寺創用の

初も黄金二枚をとり堂材をとり（三十四）揚（三十五）の（三十六）後一位（三十七）叙せらる當寺創用の

と号とひし（三十八）榊系堤の南のり頃（三十九）のり（四十）尚寺と光巖寺と号と

天和二年田緑の災（四十一）ある依ある（四十二）二年（四十三）入りの地（四十四）より（四十五）

額あり 後水尾帝の勅を奉（四十六）りて良恕法親皇筆を添られ（四十七）と

昔の本堂（四十八）は揚る今（四十九）の（五十）昔（五十一）此川筋（五十二）より（五十三）程（五十四）の古松（五十五）又此

面を覆（五十六）ふ所の古松をとり（五十七）昔（五十八）此川筋（五十九）より（六十）程（六十一）の古松（六十二）又此

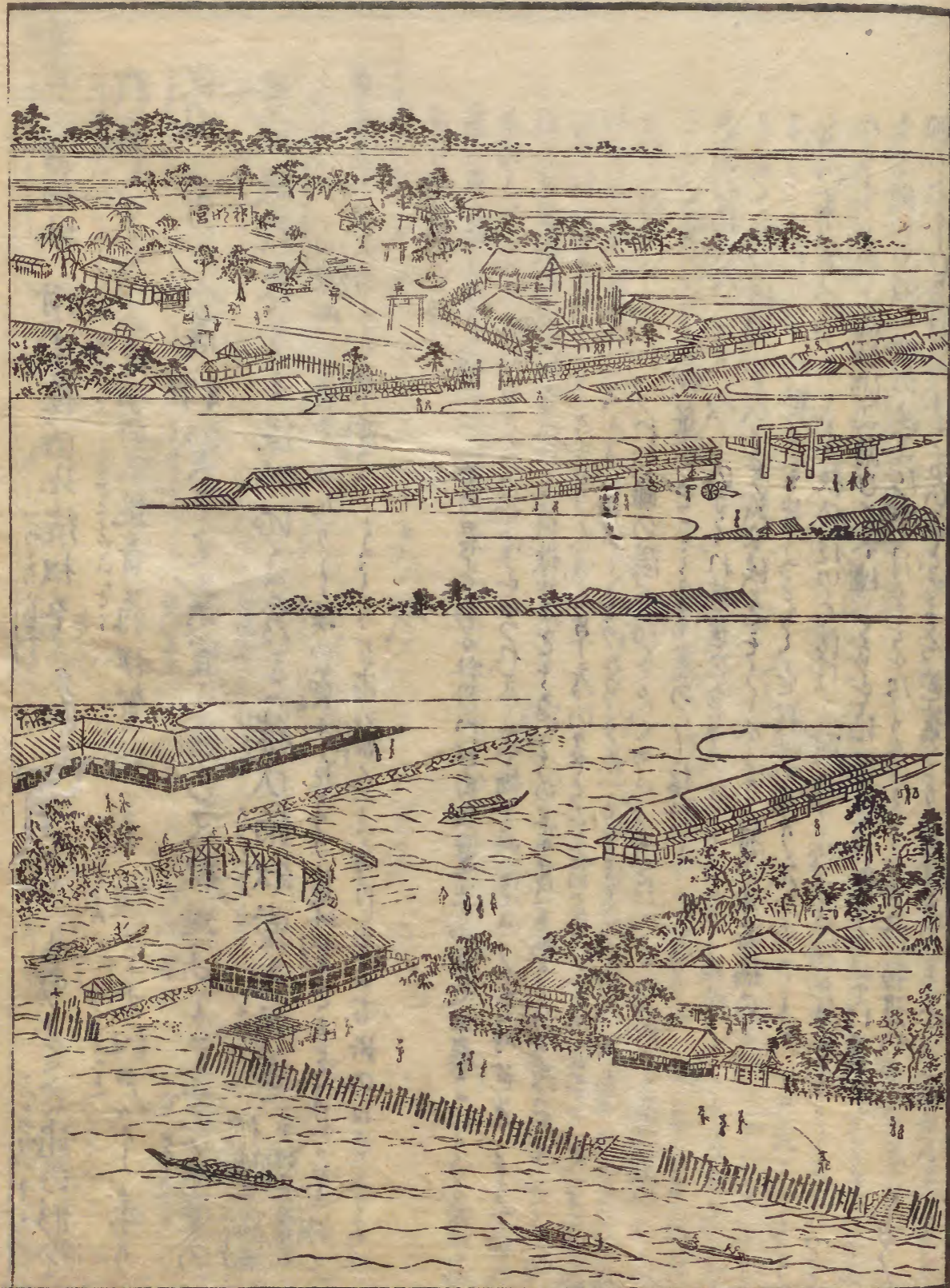
川を隔て南岸の地（六十三）に知恩院（六十四）宮尊空法親皇御（六十五）函（六十六）棲（六十七）の舊跡（六十八）

天王山雲光院 清澄町大川の傍（六十九）万年橋（七十）の南端（七十一）あり（七十二）禪宗（七十三）はて

武列越生の龍徳寺（七十四）に属し本尊（七十五）の聖觀世音閑山（七十六）放光（七十七）の東明

和尚と号く宝曆七年丁巳 台命あり依創建（七十八）する所の蘭若

あり（七十九）閑基の年（八十）歴久（八十一）れ（八十二）のり（八十三）を（八十四）



深川
靈雲院



靈雲院

芭蕉庵

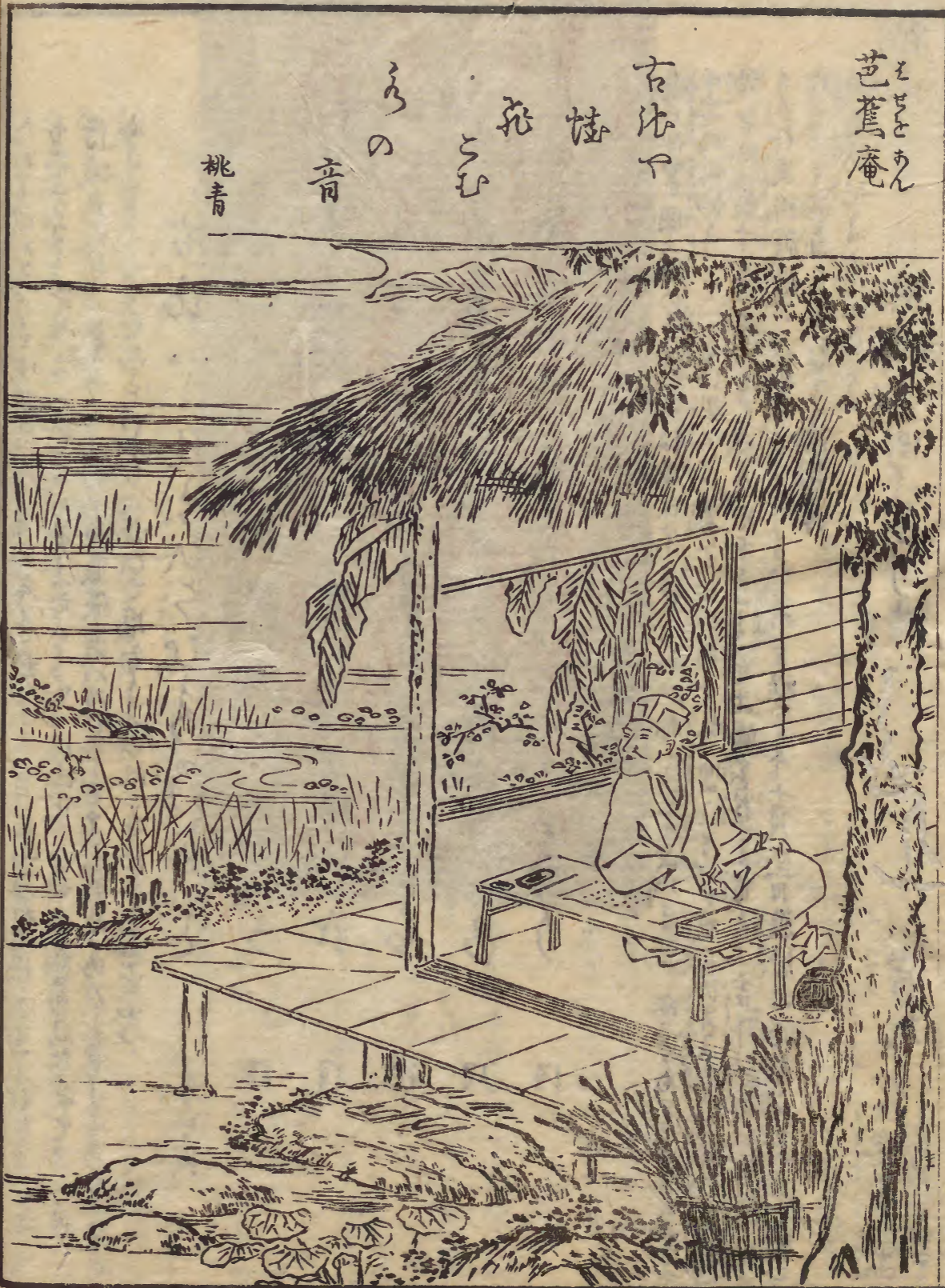
古池ヤ

花 桂

の

音

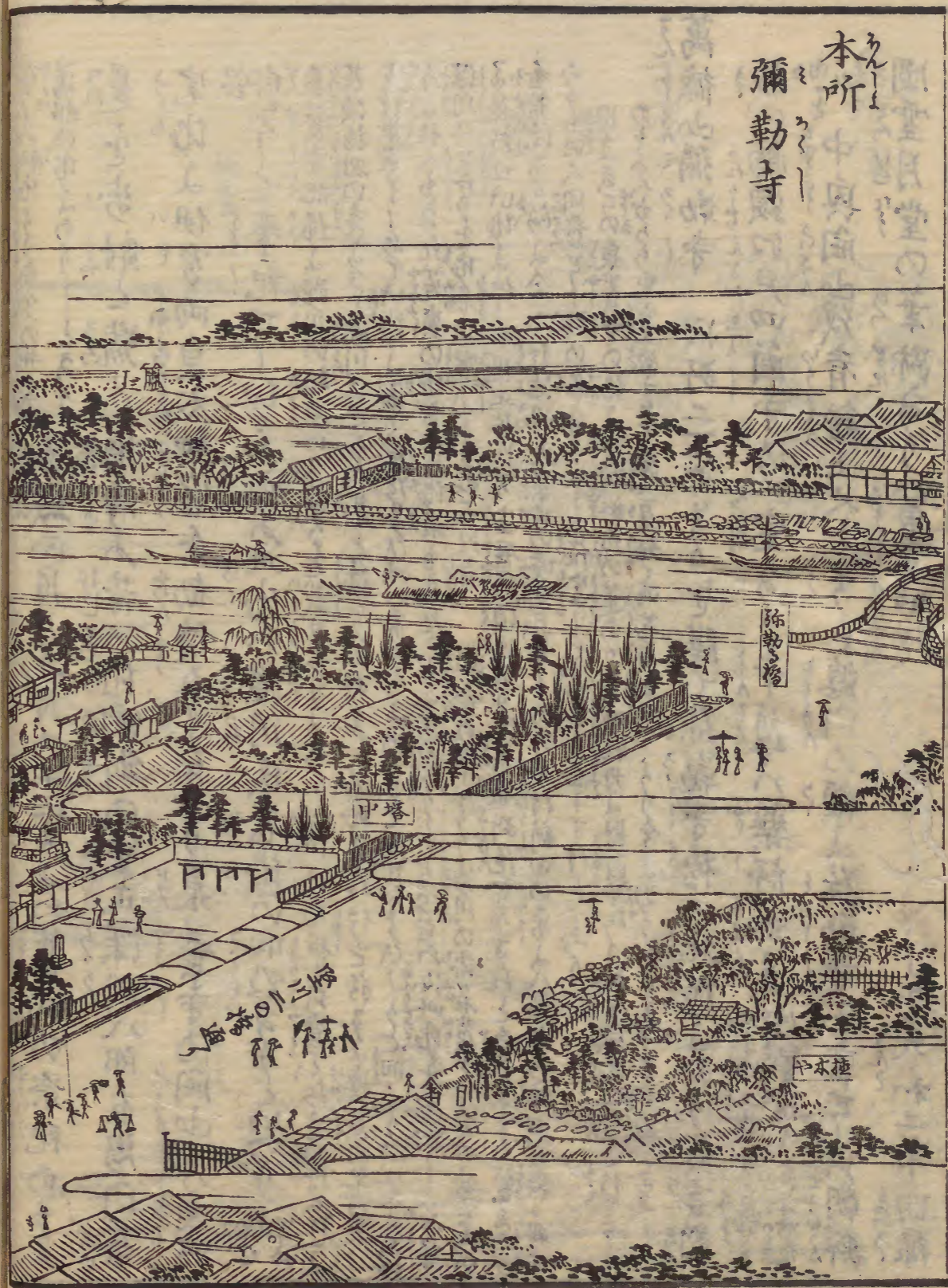
桃青



萬徳山彌勒寺 日所二丁のまりを隔て弥勒寺橋の北結よりの真言新
 義の禰頭江戸四箇寺の一室あり奉尊の薬師如來 付記失たりとて其末
 由と 中奥山寂有鏡上人と号と總門の額に弥勒寺と書せり朝鮮
 國雪月堂の筆跡あり當寺旧柵原の如くありとて天和二年回祿

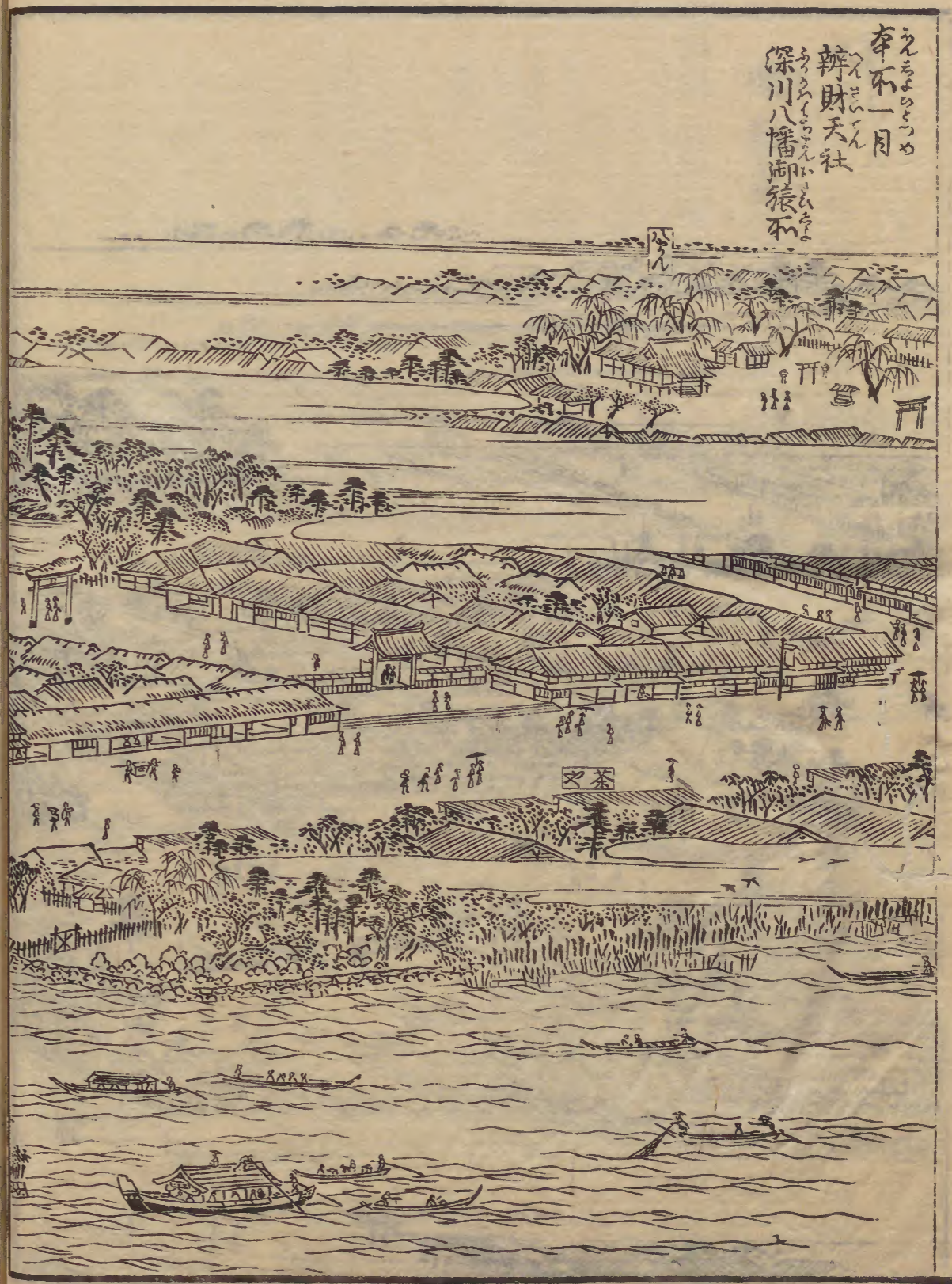
萬徳山彌勒寺 日所二丁のまりを隔て弥勒寺橋の北結よりの真言新
 義の禰頭江戸四箇寺の一室あり奉尊の薬師如來 付記失たりとて其末
 由と 中奥山寂有鏡上人と号と總門の額に弥勒寺と書せり朝鮮
 國雪月堂の筆跡あり當寺旧柵原の如くありとて天和二年回祿

萬徳山彌勒寺 日所二丁のまりを隔て弥勒寺橋の北結よりの真言新
 義の禰頭江戸四箇寺の一室あり奉尊の薬師如來 付記失たりとて其末
 由と 中奥山寂有鏡上人と号と總門の額に弥勒寺と書せり朝鮮
 國雪月堂の筆跡あり當寺旧柵原の如くありとて天和二年回祿





本不一月
 辨財天社
 深川八幡御後不



の後此地へ移されたり毎月八日十二日を祭日とて奉請多し

深川八幡宮御後所 大川端大船倉の末より富賀岡八幡宮祭

禮の砌ハ神連此地へ渡らせり

辨財天社 同呀一の橋の南の袴より奈所相別に鴻より一之縁

の始惣換技叔山氏勸請と己巳の日奉請多し

志天に於て奉請多し其の神請に果てて聖蹟ありと云ふ

至りて其の神請に果てて聖蹟ありと云ふ

國豊山同向院 兩國橋の東結よの至

称念上人の遺風ゆて捨世一流の佛域たり

の時焼死の輩の冥魂追福のため毎歳七月七日大絶鬼法會を

後行と又八日佛餉施入の檀主現當兩益の法あり

又國豊山とあるハ縁山定月和尚の等あり

本堂 奉尊阿彌陀如來座像壹大許あり

洞の阿彌陀像は諸尊ありある者四世親上人祐監和尚あり

第二世喚靈和尚今の 備中千體阿彌陀如來

思奉ると同體ありといひ縁山二十三世の貫首尊貴屋上人念持あり

命せられ其頃 官府より假の佛堂を造営

三佛堂 奉堂の右あり孫院親如大日

表より 辨財天祠 佛堂の末より其末畏

剛利して小祠を嘗て高き法塔とあり

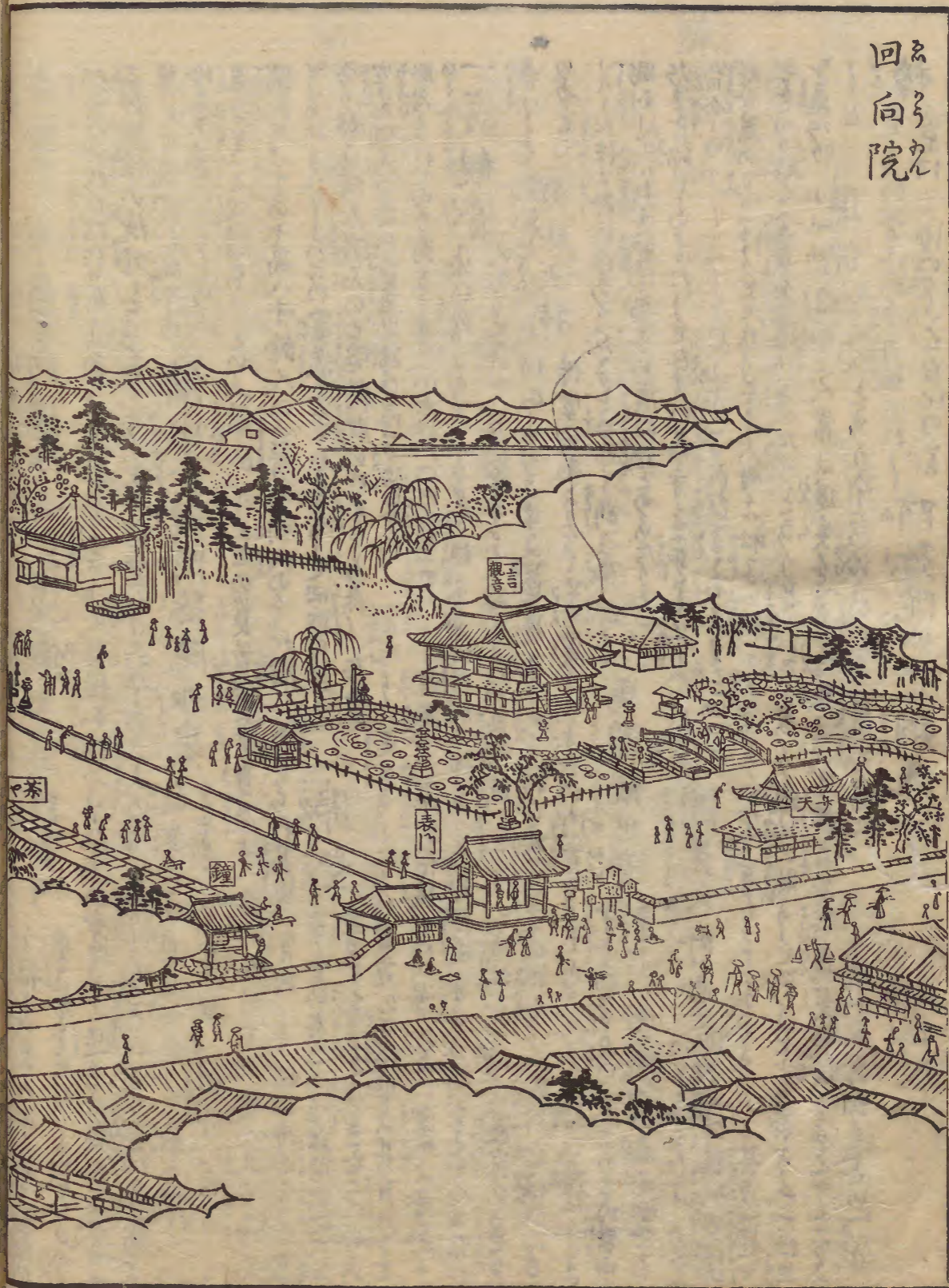
圓光大師堂 山光大師播磨室の

蓮池 信譽上人常蓮實をりて念誦代て

障 是も信譽上人手自樹られ

阿彌陀如來銅像 坐像 丈六尺あり

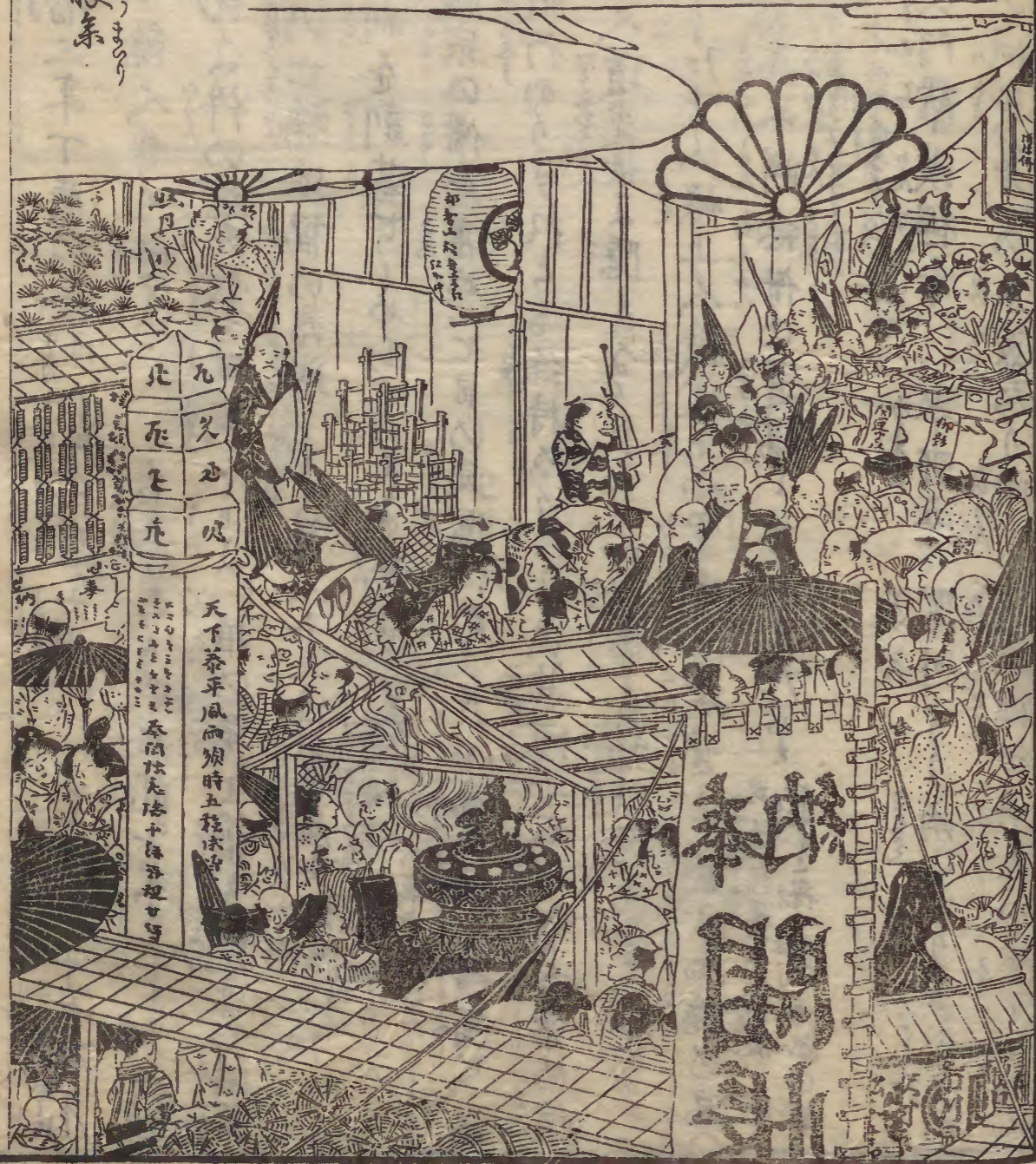
名
院
向
回



不
見
烟
中
寺
但
聞
烟
外
鐘
江
城
秋
色
遠
暮
日
隱
高
峯
白
石



日向院帳系



天下茶平風雨頻時五種味
 春回は花信十海平理也

奉納所

諸國の聖佛靈
 神等結縁のなる
 大に戸よせり
 啓合祀せんと
 敬るりの多し
 尚院に於て
 給せしむ依方
 有り使りよき
 化るる故
 殊に
 糸請
 多し



奉納所

相傳明曆三年丁酉の春正月十六日大江戸大火に仍く焼死する者凡
 十萬八千餘人あり時よ 台命ありて此地をと一一方六十
 許歩の比よ件の焼死骸を埋藏しよ一堆の塚を築き號けて漏澤
 園と唱ふ乃亡魂追福の爲増上寺第二十二世貴屋大和尚歿す
 一字の梵刹を創基せしめらる當寺是あり 昔の諸宗山を統率ししりかんと
 諸宗の僧を集め一七日の回塚の事ありて千部の経を讀誦せしめ
 大法會後行のりされとも住持ありし其頃小石川智香寺の信
 譽自心上人道光世に隱居するに當りて攝住せしめ第二世よて
 角山と稱したるの依上人彼塚上小堂宇を建營し長し幽魂の冥
 福を助むる爲不斷念佛の道場とせしめたり 周云信譽上人佛像を造る
 則し學業たり當院に安する所の
 佛像の造る此上人の彫造ありと云り

天息山五百大阿羅漢禪寺 本所五日笠川より南あり黃檗流の
 禪林也河東第一の名蓋たり角山の藏眼禪師中興の象先和尚又



猿に泉鏡寺の池に
 生ずるところの蓮花の
 重瓣紅花もて花形
 牡丹の髻髻たり故よ
 奇観とて寛政
 九年の晩夏
 此の花を
 獲しより
 今よ
 新に
 去り

猿江

摩利支天祠

靈驗炳然
諸人常以
未由拾遺
君不令



松雲禪師を以爾基の大祖と稱す

佛殿

本尊

釋迦牟尼佛拈華像

長一丈六尺下は巨石を

脇士

文殊

普賢

八尺

阿難

迦葉

九尺

左右の階壇

小列

所の

五百

阿羅漢

の像

各等身よ

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

本尊の

黄檗隠元

人の筆あり

額

正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

額

の正堂内

五百羅漢造立之末由
松雲禪師ハ京兆の人寛雄ちんちゆうとしてとくく正信を具すと
佛ぶつ工こうの俗稱しやくしゆうを寛文九年己酉くわんぶんくわんねん十二じふに撰せんの瑞龍精舎すいりゆうしゆうが小入せうにりて鐵眼禪師てつがんぜんしの許もとを辭やして
隨したがひつ維い髮はつして僧そうとある後游方こうぼうの懐なつめめより師しの許もとを辭やして

嶺南

美法

帷幄

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

又六

乃

者

現

踪

影

勢

第

石

松

とみき川
小名木川
五松

深川の末
五松松と
石の取を
さして

川上を

かましも
や

月の
友

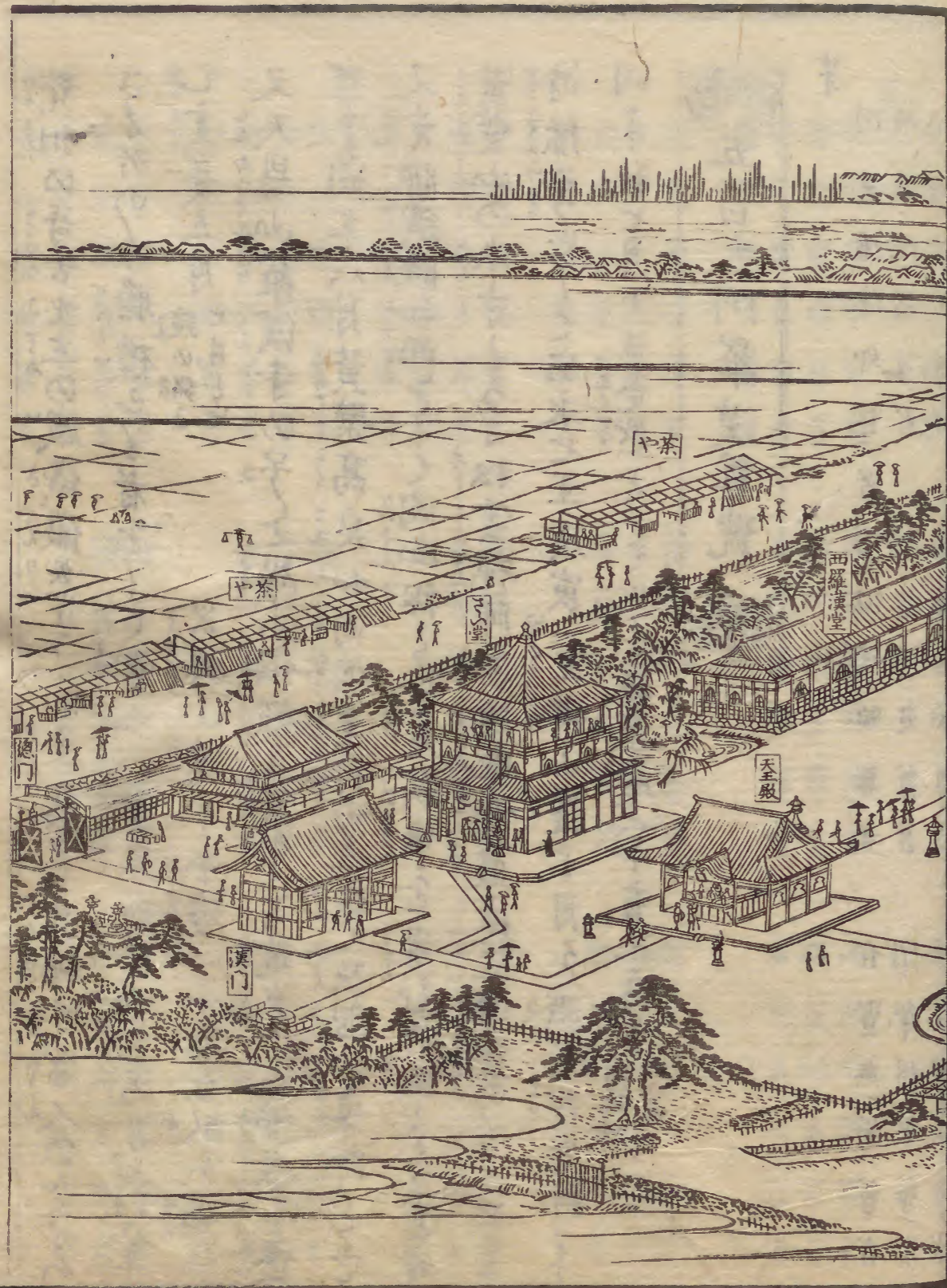
芭蕉



海西小瓢歴一豊前國羅漢寺小至り唐土天台山の逆流並に假賢
 順とて二僧一夜に造立せしむる五百聖者の石像を膽禮し
 恭敬日く小厚く其後溜り五百羅漢の像を手彫りんとするの意
 のり歸省の日鐵眼禪師果して其命あつて以て遂に貞享年間江戸
 小末り元禄辛未始て浅草寺の境内壽松院に就て假屋を假け
 衆人をとりめ羅漢の本像を彫刻し弘福寺の鐵牛和尚衣資を喜
 捨し一尊を刻しむるといふ時至りて施あるを微くこよ
 歲月を歴たを然る小同壬申の年大倉前一十六負の道俗結盟
 輔佐を癸酉孟春より五十尊成甲戌二月忝も
 御國母桂昌一位尼公金を賜て佛像造立の資とすあは此時
 十尊成彫堂を造るのりしより縁化響の愈々如く施財日く
 小多く竟り一十餘霜を経て完く本尊丈六の釋迦佛及び
 阿羅漢等とて五百二千有餘餘の佛像縹緲として現れ其

五百羅漢寺
 三廂堂





梵相の奇古坐立の威儀儼然として生り如く其妙手常人のそと
 ざる所のり瞻禮する者をして靈山一會未散の嘆のらしむ八年
 乙亥夏五月 鐘の鏡よ 七月とせ 公徳小達一本境一千五百畝を湯ひ
 又天恩山羅漢寺の号を湯に依假に堂宇を造立して佛像を遷
 して同年八月黄檗高泉和尚偶東行ありて運て點眼の導師とせ
 又先師鐵眼和尚をして岡山祖とせ是其原を貴むの故とせ又其時
 黄檗山の末寺とある松雲禪師其頃既伽藍建立の企ありとせとも
 時縁多しとして宝永七年庚寅一旦疾に罹る月を越て起て終り
 同年秋七月十日奄然として化せ時より歳六十有二あり
 法臘四十二年

五百大阿羅漢尊號

第一 阿若憍陳如尊者 阿泥樓頭尊者 有賢無垢尊者
 須跋陀羅尊者 迦留陀夷尊者 闍聲得果尊者
 梅檀藏王尊者 施董無垢尊者 橋梵般提尊者

第十 迦那行那尊者 婆蘇槃豆尊者 法跋迦樂尊者
 優樓頻螺尊者 佛陀密多尊者 末田底迦尊者
 難陀羅目尊者 佛陀難提尊者

第二十一 優波鞠多尊者 僧迦那舍尊者 教說伽葉尊者
 商那和修尊者 達磨無憂尊者 憶持因緣尊者
 定果德業尊者 莊嚴魚憂尊者

第三十一 破邪神通尊者 堅持三字尊者 阿菟樓駄尊者
 毘羅羅子尊者 毒龍皈依尊者 同聲誓首尊者
 毘羅羅舍尊者 伐蘇密多尊者 閻提首那尊者

第四十一 悲密世間尊者 獻花提記尊者 眼光定力尊者
 伽耶舍那尊者 莎底密多尊者 富那夜舍尊者
 解空無垢尊者 伏陀密多尊者

第五十一 不著世間尊者 願空第一尊者 羅度無盡尊者
 伽耶天眼尊者 十劫慧善尊者 無憂禪定尊者
 伽耶天眼尊者

金剛破魔尊者 金剛破魔尊者 金剛破魔尊者
 金剛破魔尊者 金剛破魔尊者 金剛破魔尊者
 金剛破魔尊者 金剛破魔尊者 金剛破魔尊者

第百一十一 道世尊者
第百一十 遊戲尊者
第百一十 無勝尊者
第百一十 直意尊者
第百一十 法眼尊者
第百一十 善思尊者
第百一十 持世尊者
第百一十 修道尊者
第百一十 寶光尊者
第百一十 明網尊者
第百一十 寶勝尊者
第百一十 寶見尊者
第百一十 善慧尊者
第百一十 寶三十一尊者
第百一十 寶懂尊者
第百一十 調達尊者
第百一十 自淨尊者
第百一十 馬勝尊者
第百一十 境界尊者
第百一十 悟達尊者
衆首尊者
明首尊者

金首尊者
辨德尊者
汰燈尊者
天動尊者
不勤尊者
普光尊者
善眼尊者
慧積尊者
道仙尊者
善相尊者
大相尊者
光英尊者
梵勝尊者
摩帝尊者
曇摩尊者
明照尊者

敬首尊者
離垢尊者
魚勝尊者
休息尊者
智積尊者
勇寶尊者
慧持尊者
帝網尊者
奮迅尊者
善住尊者
權教尊者
光曜尊者
慈寬尊者
歡喜尊者
善等尊者

第百一十一 馬頭尊者
第百一十 雷德尊者
第百一十 妙懼尊者
第百一十 除憂尊者
第百一十 善注尊者
第百一十 貝壽俱提尊者
第百一十 羅網思惟尊者
第百一十 摩訶俱締尊者
第百一十 九十一塵三昧尊者
第百一十 拂便法藏尊者
第百一十 方空無名尊者
第百一十 解便法藏尊者
第百一十 畢陵伽蹉尊者
第百一十 八十一行不著尊者
第百一十 修利不著尊者
第百一十 周利槃特尊者
第百一十 摩訶那尊者
第百一十 薩陀波菴尊者
第百一十 七十一通精進尊者
第百一十 堅通精進尊者
第百一十 瞿羅那尊者
第百一十 無念解空尊者
第百一十 無業宿盡尊者

觀行月輪尊者
七佛不動尊者
摩利不尊者
瞿沙比丘尊者
見人飛騰尊者
乾陀訶利尊者
解空定空尊者
觀身無常尊者
摩訶利尊者
摩訶利尊者
嚴土尊者
大忍尊者
雷音尊者
初寶覆藏尊者
汰王苦提尊者
辟支轉智尊者
觀行月輪尊者
摩利不尊者
七佛不動尊者
瞿沙比丘尊者
見人飛騰尊者
乾陀訶利尊者
解空定空尊者
觀身無常尊者
摩訶利尊者

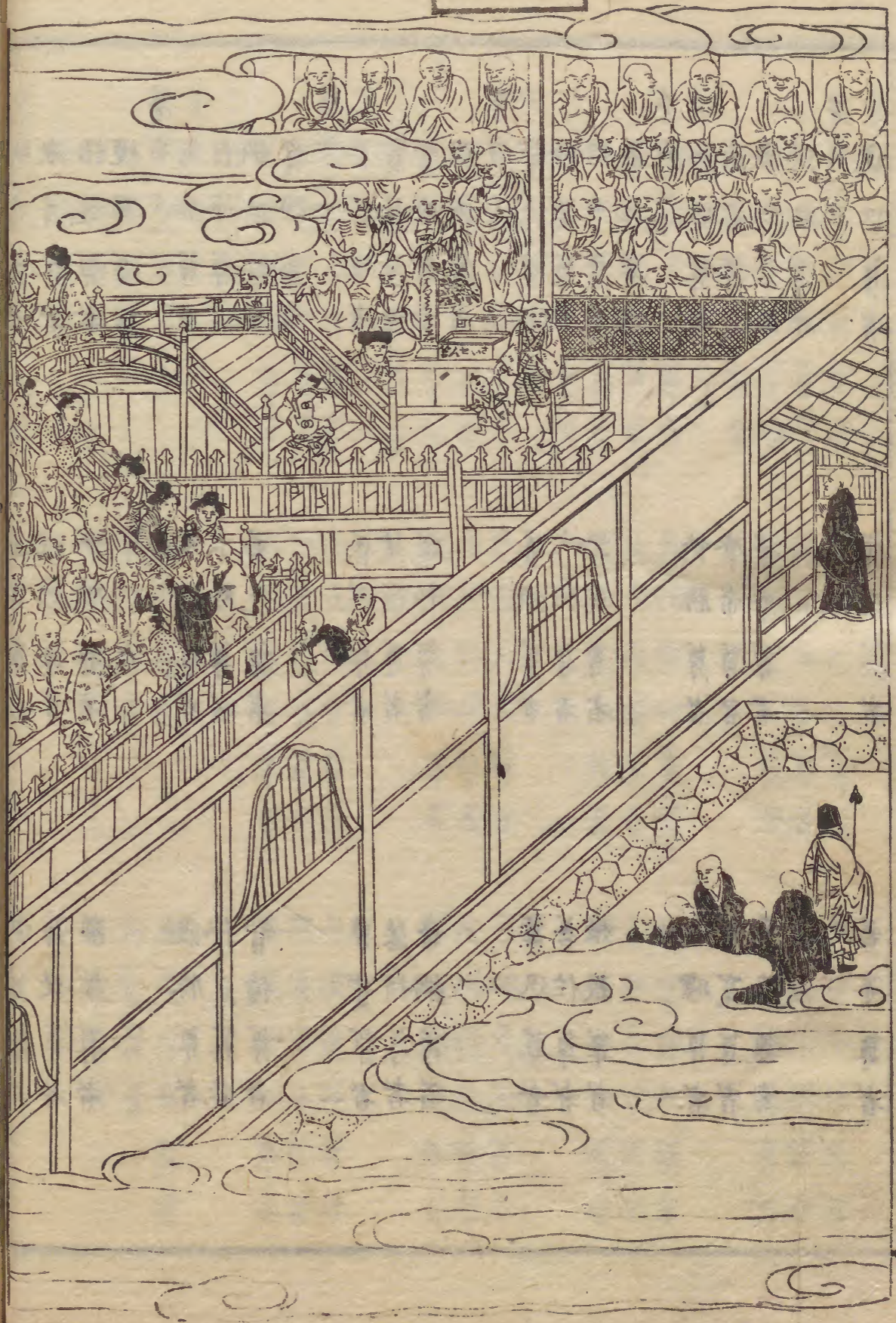
無憂自在尊者
金髻尊者
香象尊者
山項龍聚尊者
神通億劫尊者
汰藏永劫尊者
阿那邠提尊者
三昧精進尊者
金剛精進尊者
解空自在尊者
師子比丘尊者
不空有尊者
解空空有尊者
成就劫因緣尊者
無量本行尊者
千劫悲願尊者
成就劫因緣尊者

五百羅漢堂
內相之圖
共五枚

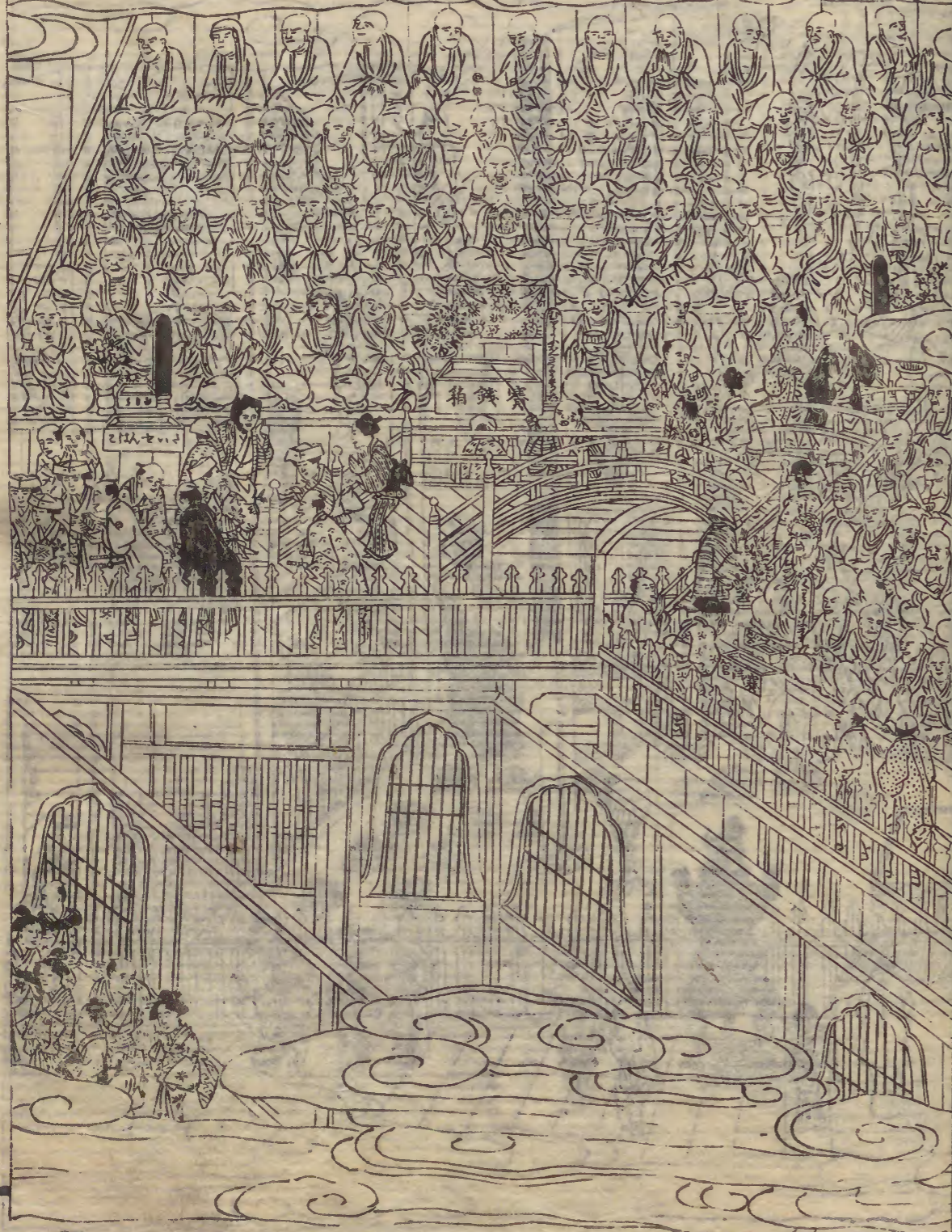
東漢東羅
之堂面圖



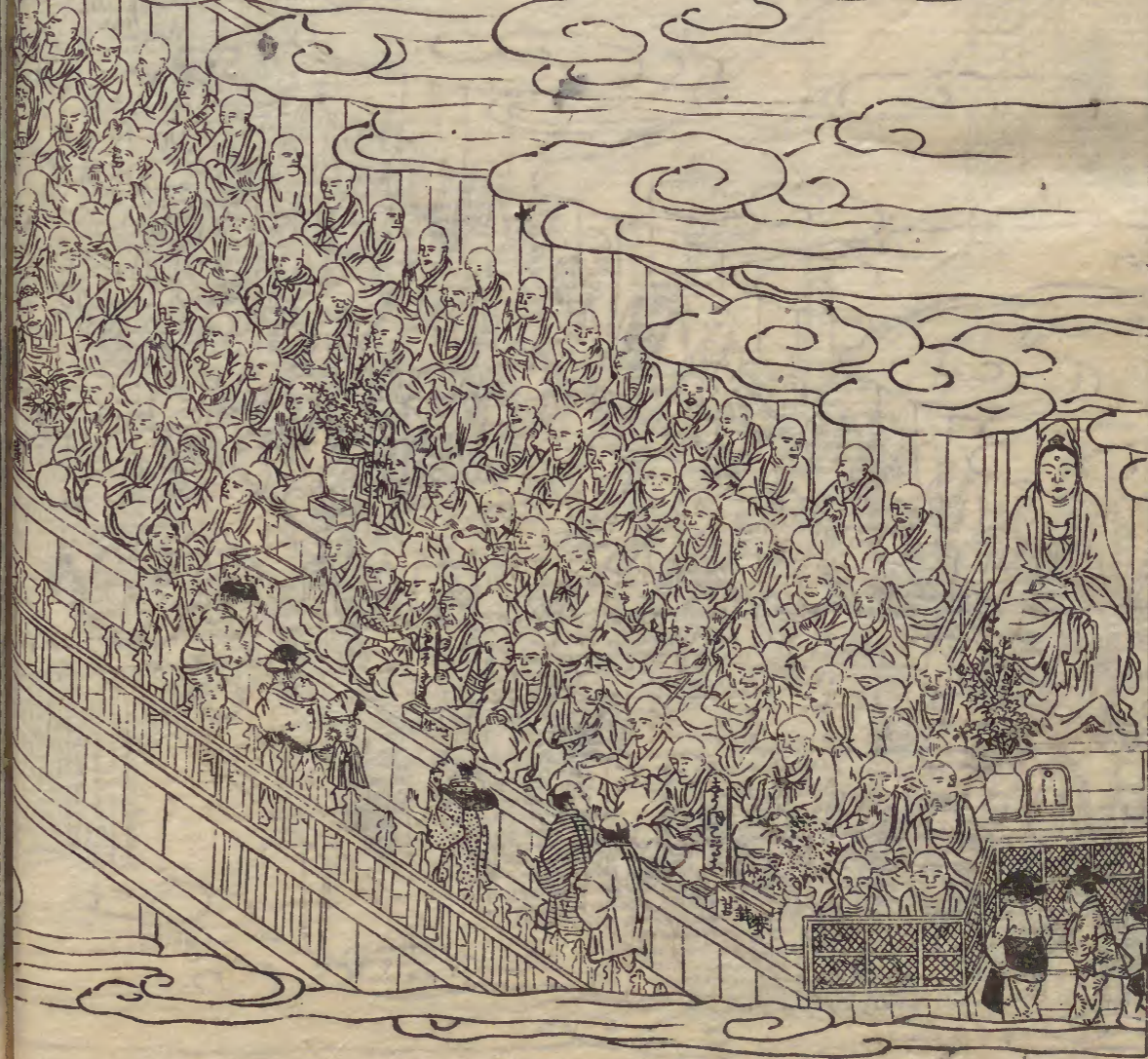
正反面圖



正面目圖

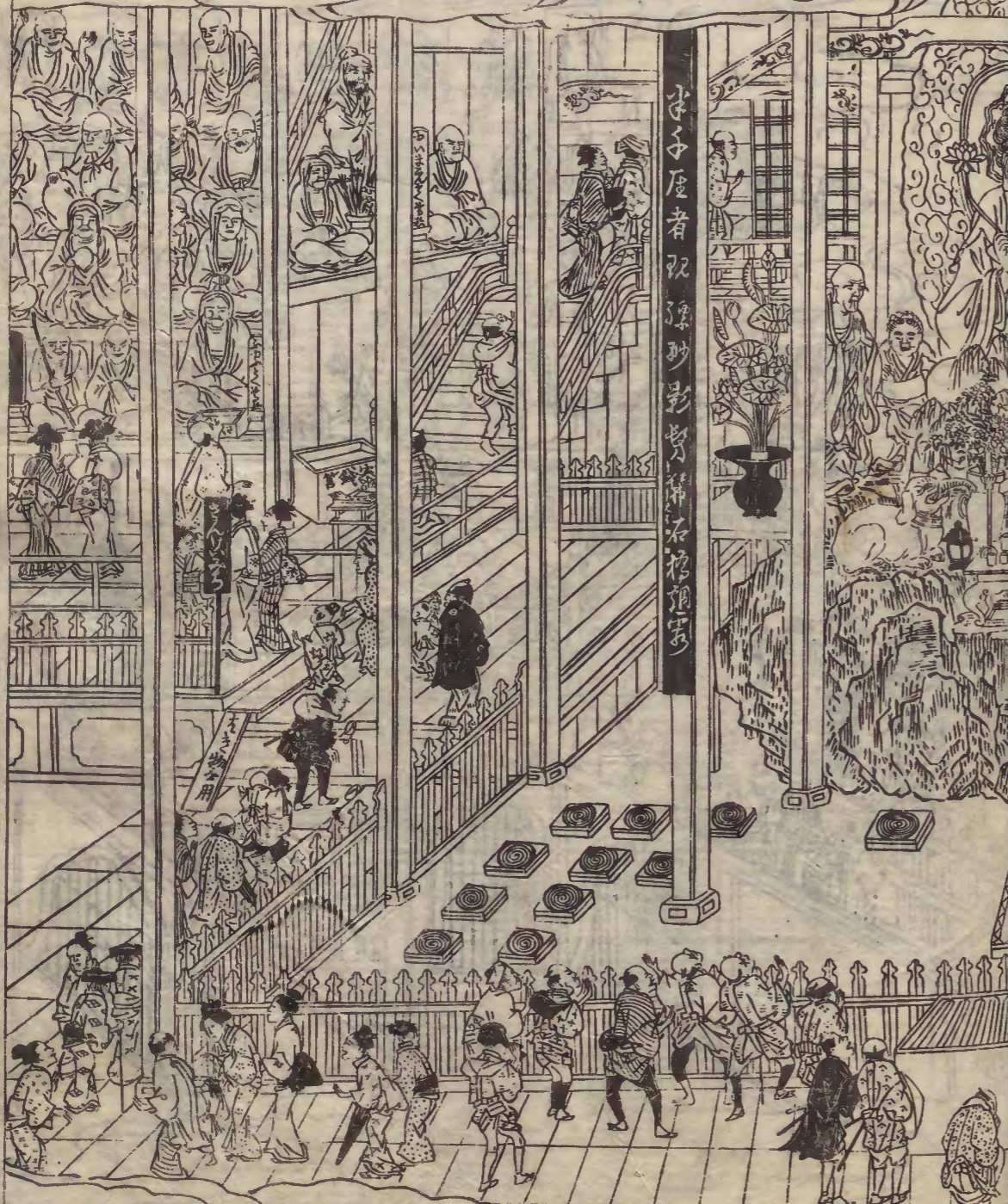


東漢西羅堂面圖之



圖面正

之正中
圖尊面

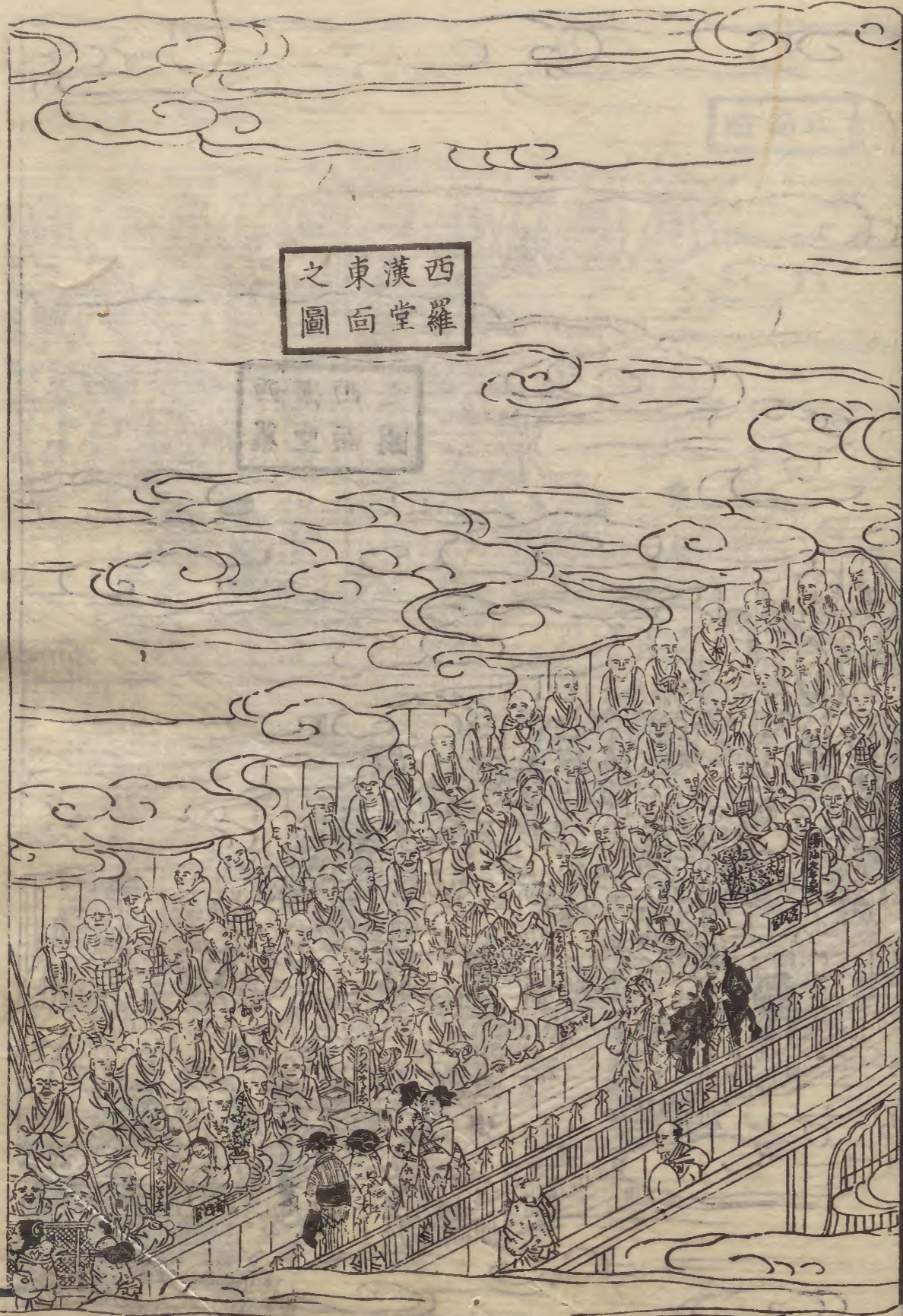


諸

圖面正



西漢東之
羅堂面圖



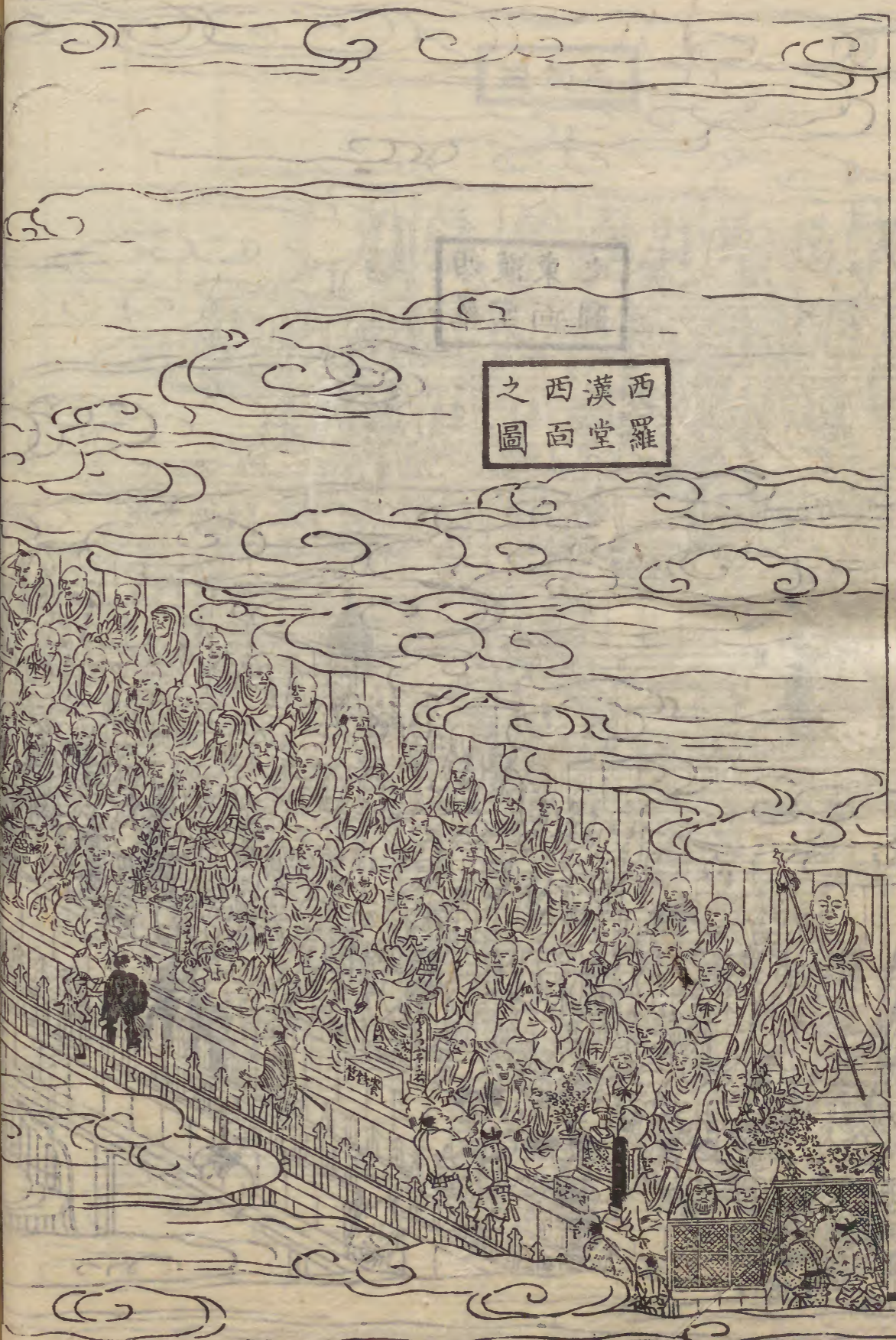
正面圖



正 面 圖



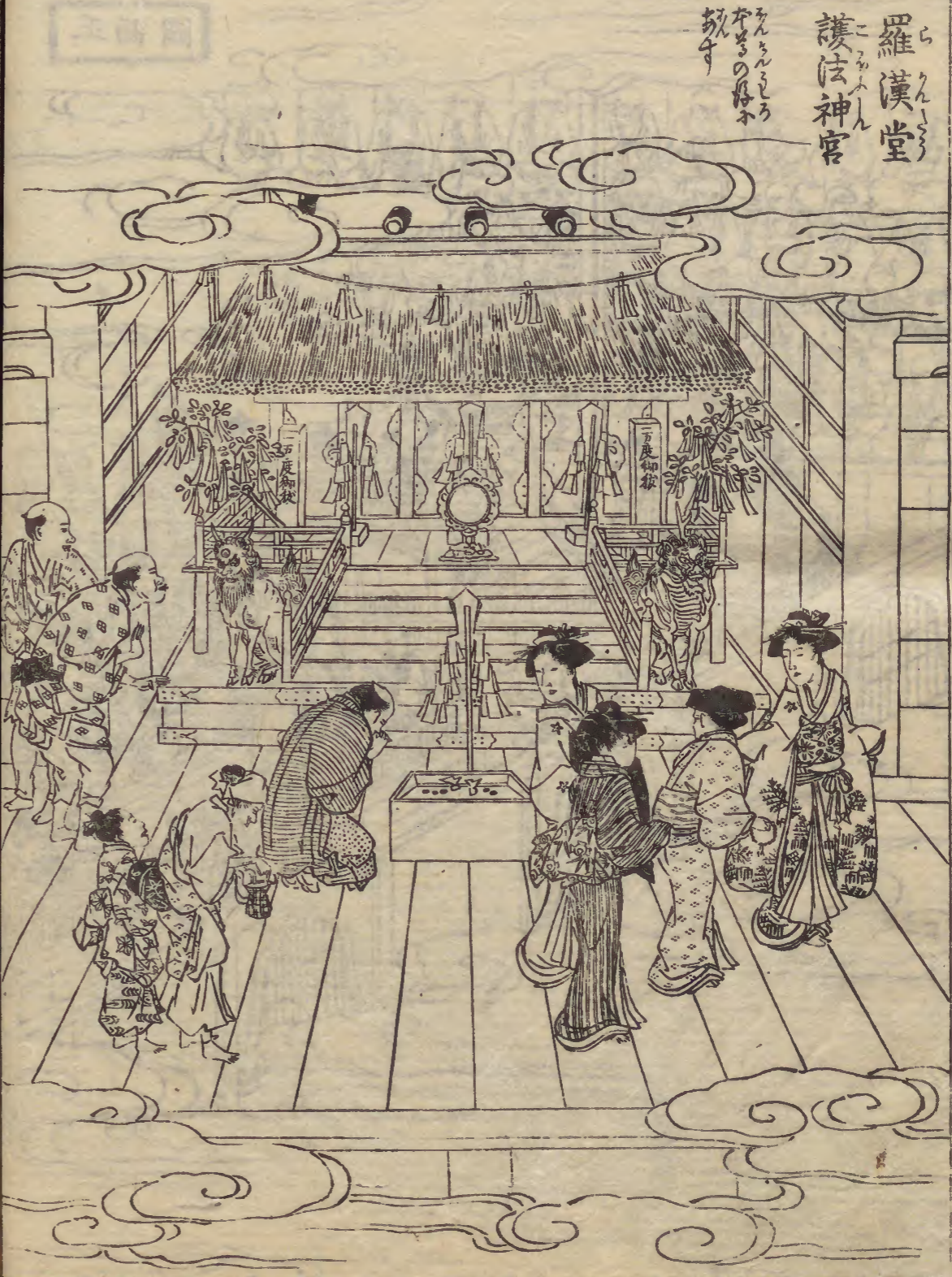
西 漢 西 羅
之 堂 圖



第 二百 十一	第 一百 一	第 百 九 十	第 百 八 十	第 百 七 十
樂婆 覆私 藏叱 尊者	來無 味邊 尊者	善大 星力 尊者	妙善 臂見 尊者	善德 意首 尊者
尊者	尊者	尊者	尊者	尊者

火心 焰平 身等 尊者	賢吉 劫祥 首咒 尊者	大滿 天宿 尊者	電淨 光正 尊者	善變 根光 尊者
尊者	尊者	尊者	尊者	尊者

頗不 羅可 墮比 尊者	金鉢 剛多 味羅 尊者	淨闍 藏陀 尊者	寶善 仗觀 尊者	德花 項光 尊者
尊者	尊者	尊者	尊者	尊者



羅漢堂
護法神宮
らんごんどう
ごんごんごん
ごんごんごん
ごんごんごん

第三百二十一

頭怡尊者

燈導首尊者

須達那尊者

士應真尊者

第三百一十一

堅固心尊者

聖切空尊者

功德相尊者

第三百四十一

白香象尊者

識自生尊者

聲引衆尊者

第三百五十一

大藥尊尊者

勝解空尊者

月蓋尊尊者

第三百六十一

直福德尊者

須那刹尊者

提婆長尊者

第三百七十一

瞿伽梨尊者

日照明尊者

無量明尊者

無憂眼尊者

第三百八十一

去蓋障尊者

淨除垢尊者

無盡慈尊者

第三百九十一

行願持尊者

天眼尊尊者

寶蓋尊尊者

喜信靜尊者

第四百一

金光慧尊者

伏龍施尊者

蓮花淨尊者

利亘羅尊者

第四百十一

大威光尊者

寂上尊尊者

最無比尊者

第四百二十一

定花至尊者

周陀婆尊者

甘露法尊者

超法兩尊者

聲嚮應尊者

光明燈尊者

忍生心尊者

護歎願尊者

離淨語尊者

福業除尊者

修無德尊者

拈檀羅尊者

項生尊尊者

喜見尊尊者

成大利尊者

衆德首尊者

除衆憂尊者

善修行尊者

自明尊尊者

去諸業尊者

颯陀怒尊者

無盡智尊者

神通化尊者

摩訶南尊者

幻化空尊者

拘那意尊者

調定藏尊者

自在主尊者

金剛尊尊者

超絕倫尊者

無邊身尊者

住世間尊者

自在王尊者

德鈔法尊者

應赴供尊者

執寶炬尊者

阿氏多尊者

定拂羅尊者

鳩舍尊尊者

羅餘習尊者

喜無著尊者

心定論尊者

薩和壇尊者

喜藍王尊者

法首尊尊者

金剛藏尊者

除疑網尊者

無垢德尊者

坐清涼尊者

和倫調尊者

慈仁尊尊者

那羅達尊者

編具足尊者

思善識尊者

無量光尊者

金剛明尊者

賢首尊尊者

無垢稱尊者

明世界尊者

燭慢意尊者

月菩提尊者

最勝懂尊者

棄惡汰尊者
常悲愍尊者
普莊嚴尊者

第 四百三十一

光焰明尊者
堅固行尊者
謝雲雨尊者

第 四百四十一

樂說果尊者
觀無邊尊者
師子翻尊者

第 四百五十一

破邪見尊者
義成就尊者
善住義尊者

第 四百六十一

行敬端尊者
德相洽尊者
師子作尊者

第 四百七十一

勝自淨尊者
有性空尊者
淨那羅尊者

第 四百八十一

滅惡趣尊者
寂靜行尊者
怡真常尊者

第 四百九十一

尋常應尊者
菩薩慈尊者
拔度羅尊者

第 五百

願事眾尊者
注茶迦尊者
鉢利羅尊者

第 五百

大迦葉尊者
舍利弗尊者
目捷連尊者

第 五百

阿難尊者
須菩提尊者
旃延尊者

第 五百

阿波羅尊者
羅漢尊者
迦羅尊者

一音變動警覺曉昏
觀音大士如入此門
幽明莫滯功德難論
存沒俱利消融百冤
雲禪功烈函益乾坤

修洪規範解塵勞煩
由通無礙卻忘聞根
國平岷泰斯子斯孫

元祿九年丙子四月穀旦

牛頭鍊牛機謹誌

櫻樹

境内より交々五年庚申櫻樹九十餘株を

挑の去手

元文紀元丙辰
當寺の境内南

我々の云々これを

岡山堂

方丈の東より此此の享保十八年の頃鐵眼禪師當寺を退去の後
の像を遷すに三代堂とも稱し鐵眼禪師を以て象先和尚ありしに松雲老人本
禪師の行はるに孫列瑞龍寺の禪文に詳なり

中興象先和尚の黃檗四世の法孫として鐵眼禪師の法脈たり

當時松雲禪師化寂の後假堂も破壊し佛像も雨露の

為に侵されたりを深く患へ正徳三年癸巳本所鐵眼

和尚の命を受始て大江戸より來り當寺に住り享保二年丁酉

正月より十有餘年の間心肝を碎れ寒暑風雪の厭あり

日々に麻巾の街市へ入て行乞し既して勸進の功返暮に受

る所の一握一投の采穢を積て其料に元同十年己巳より今

存する所の佛殿僧房悉く建立成就せしを依同十四年己

酉二月岡堂惣供養の大法會を行ひより孟蘭盆の大施餼

鬼會を用く當寺岡山象先和尚たるより其理顯然たり

とどとも故のりて鐵眼禪師を寢山として自の所寶列和尚

を二代として又松雲禪師創業の大功あるを以一代開基と稱し

自三代の席に坐せしる隱元禪師歸化の後持齋一食して

深く貧者とのりしる佛像經卷と古た袈裟の外より聊も

所貯ふる事なり日々の勤行より般若經分五卷と花嚴

經行願品百五十卷とを讀誦し觀音の尊号を書寫しるるの

甚殺積て山の如し又大般若經一部六百卷一字百禮しして

是を書寫し其先出家得道の時捨瑞龍寺に入て法道成



龜戸
宰府天満宮

當社の内茶貨
食店多く各
生例を構(廻)る
畜(業)平(場)の
地(名)を以て
を美味なり

就の誓願を發し二年の間双手の指爪切八十卷の花嚴經を
血書す其後當寺殿堂の管大平成といへども宗門の坐禪
夏冬の結制行れさうを闕典ありと依後住榮朝肝命
を受けてえ文二年丁巳の冬洞涸兩首坐を立て五千指の僧を
集め江湖の大會を行ふ時 大樹より取らせたり
坐禪の行相成さるるを則江湖の僧財とて采五百俵
をたしめまうし後般若の全文を真讀しと御札を執す
竟り寛延三年己丑六月五日七十三歳とて濕般舟の大定
入貴絨香苑を捧じとほしひ来るるの三日之夜炎暑甚
しといへども遺骸獅変るる茶毗して全身舍利とせり
其香根の室塔に収て今於
中興堂に存せり
當寺の黃檗流江戸最大の禪園とて佛閣の巍々たる
日城にわくとしなり一々祿年間寺領山号等を揚り享保九



年甲辰十二月

大樹始て當寺へ入せしれ其後同十五年正

月晚課 淨聽國翌年十二月方丈に於陞坐住持象先是を

勤む同十九年甲寅三千畝の地成派あり同二十年乙卯境

内より新殿を當寺に遷せしれ其後此地より淨放鷹のあはれを

わらわしと當寺へ立寄せしれり月毎の朔日より

觀音藏法を後行し十六日より大般若經轉讀あり七月

より至れい毎夕施餓鬼を後し十六日廿五日晦日の殊に

道俗群衆と象先師より已來當寺の住持ハ風雨寒暑

を厭はせ且に大江戸の市中を行乞すをりつて勤行

と努む

宰府天満宮 龜戸村より故より龜戸天満宮とも唱ふ

別當を天原山東安樂寺聖之齋院と号せし司務兼官司

大鳥居氏奉祀せり

所々當社の南鑿川通北松代町四丁目にある

本社 祭神 天満大自在天神 相殿 天徳日命

紅梅殿 本社の前右の方にあり筑前太宰府 老松殿 同左の方にあり

回廊 廻廊の西側の門をとりて 御嶽社 本社右の方にあり

と菅祇の所よりなりて是を菅祇といふ

とあり菅祇の北の方にあり菅祇といふ

とあり菅祇の南の方にあり菅祇といふ

とあり菅祇の西の方にあり菅祇といふ

とあり菅祇の東の方にあり菅祇といふ

とあり菅祇の南西の方にあり菅祇といふ

とあり菅祇の北東の方にあり菅祇といふ

とあり菅祇の西の方にあり菅祇といふ

とあり菅祇の東の方にあり菅祇といふ

とあり菅祇の南の方にあり菅祇といふ

とあり菅祇の北の方にあり菅祇といふ



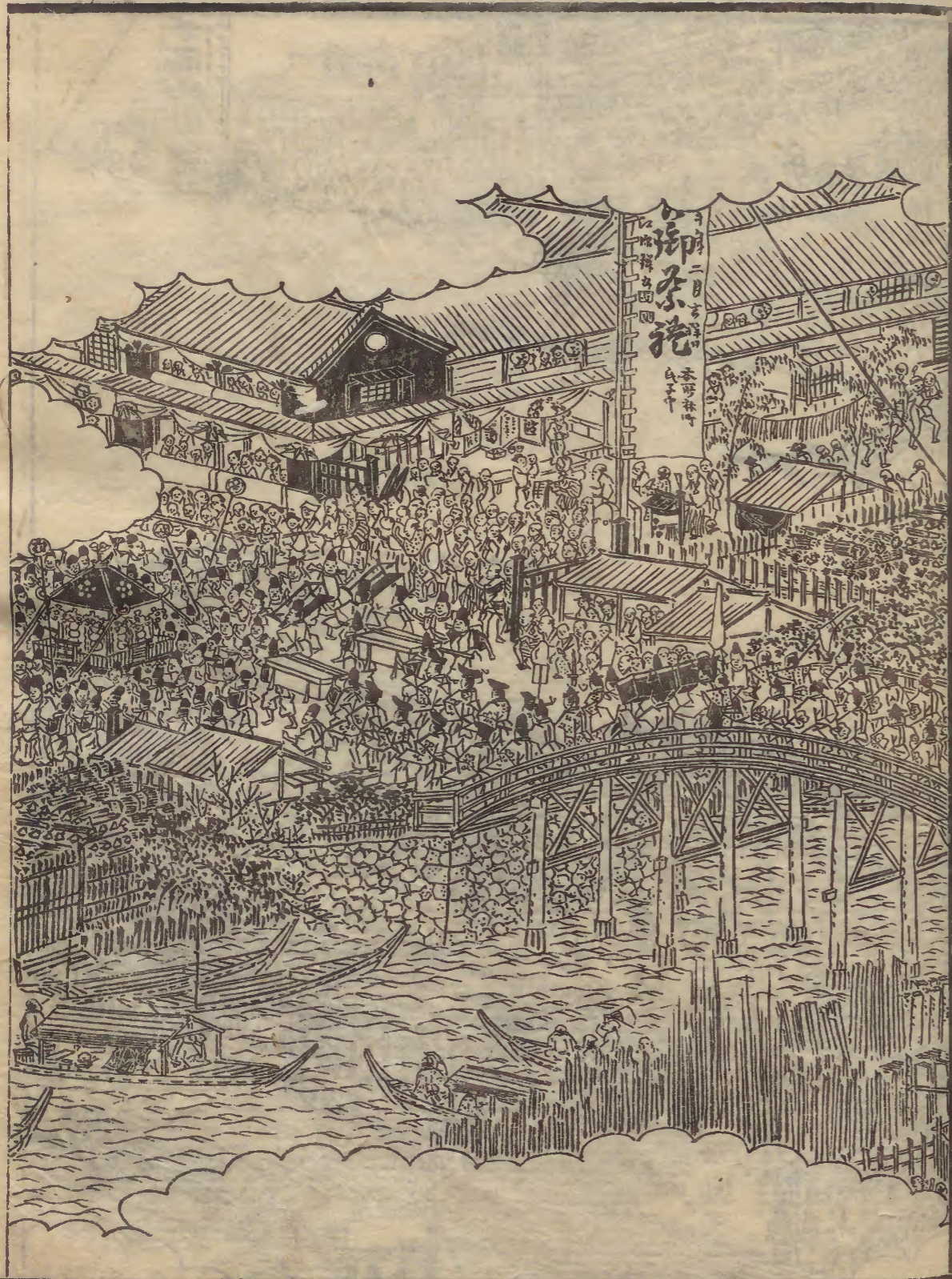
ありはる
 八百不
 其角



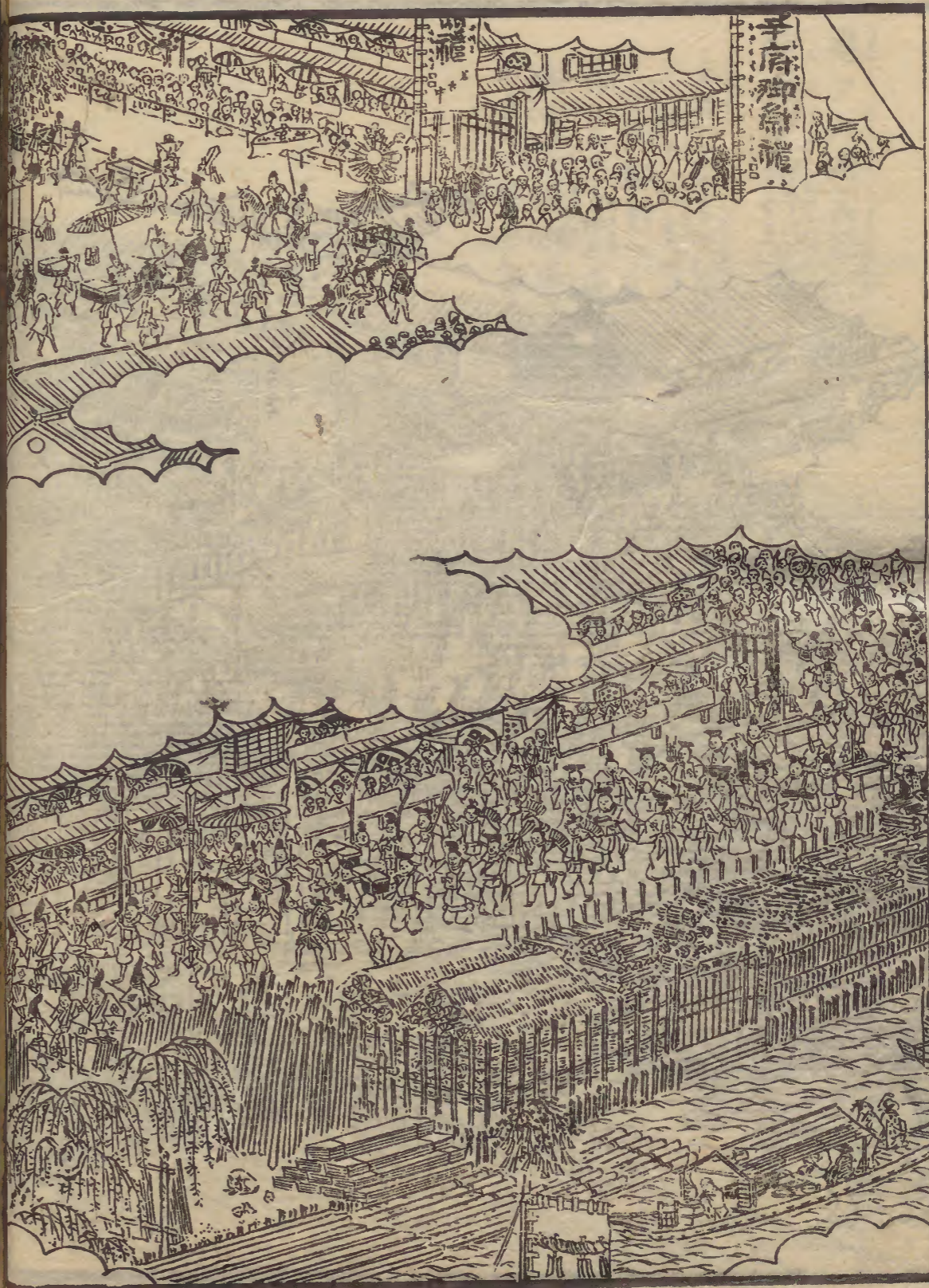
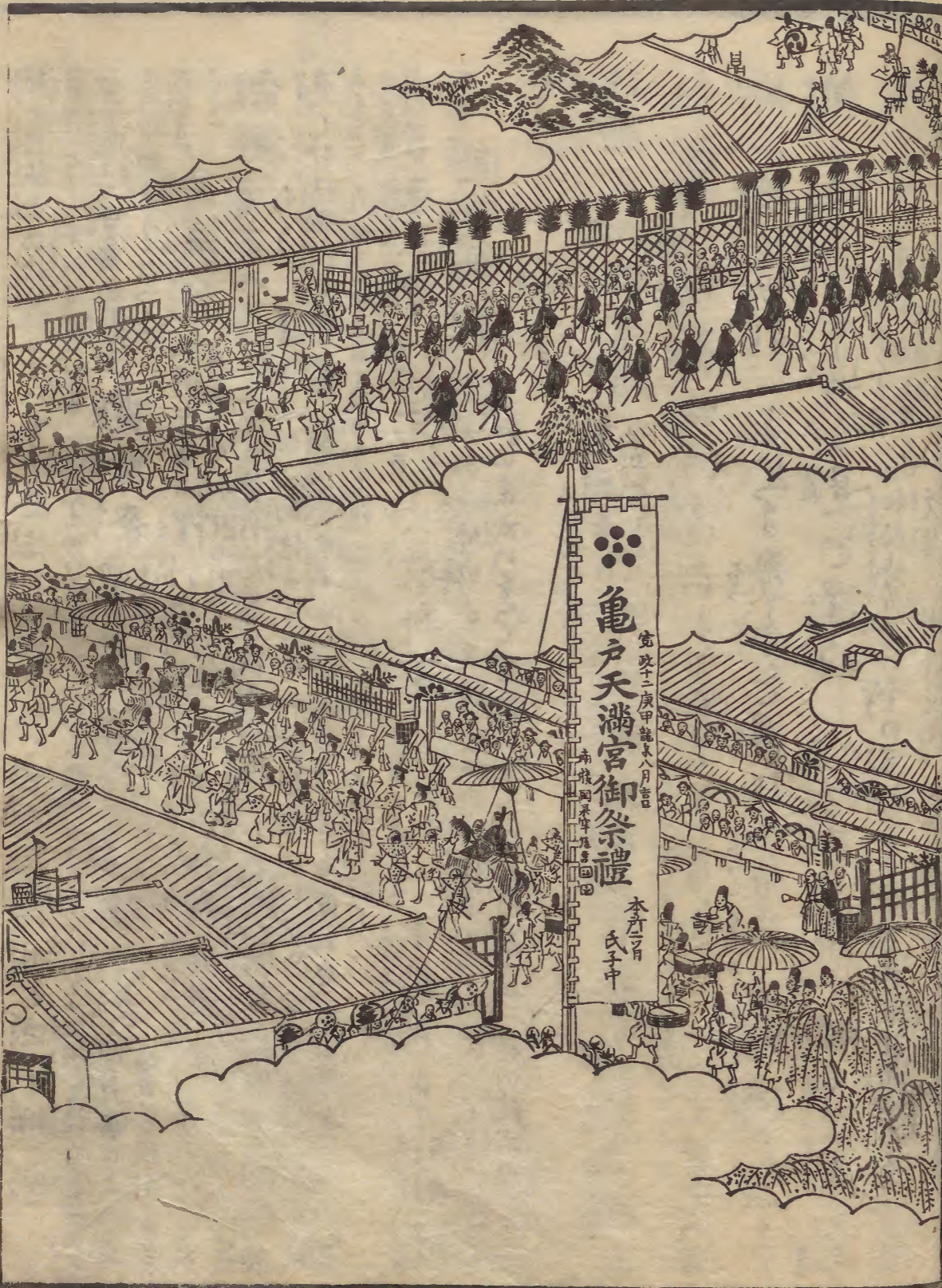
五元集
 元禄十四年
 二月二十五日
 聖廟八百餘
 御年忌於
 龜戸御社詩
 歌連御令與
 行一坐

梅松

二月二十五日
 菜種神事



亀戸天満宮祭礼
 神輿渡御行列之圖
 毎歳八月廿四日お祭町
 の四族一社幸ひり
 てお祭町をめぐり
 産子の町も縁おこせ
 都鄙のまはれ群集て
 けさの一盛りなり



梅を指梅の神祿二十八年を披露と又入て宮司仕人松明を燃し梅と幣とを
神祿二十八年の形をめぐり梅を焚て殿門より社より松明を積て是を焚
うらと祈りしとあり 雷神祭 四月朔日より七月に至 神祿夜 四月晦日と九月
名祓 六月二十五日豊川の西大河に七夕和歌連歌會 七月七日これ
祭禮 八月二十四日後水尾帝の御許より日陰三川通小松代町の河原に神幸日縁興
進てむ仕觀たり 列當大鳥居氏乗車と生子の河より由練物車樂等を擧て甚
つきと連歌會 九月十五日 火燒神事 土月廿五日より 羊祓神事 三月晦日
追儼神事 御社の夜焚けを其餘一季の中祓り多しといふとあり 一社の法式の古
雅にして他は異なる

社記云用担信祐の苗裔より始筑前大宰府より一頃正保三
年丙戌一夜菅神の靈示を蒙る其夢中 十立て夢あり
梅の推枝うれ としる後句を得たり依其後肅梅を収く
新し神像を造り是を護おして江戸より彼天満宮を今
の龜戸村に勧請せし初勸請の地今の官居より東南の畝田の中より
其後寛文紀元辛丑 台命を蒙り同年壬寅始て今の
地を賜ふ同三年癸卯官居を管心字の池樓門ホ之
す社頭の光景宰府の侍を摸り依日十一年辛亥
後水尾帝震翰を瀧江菅神の号號をわしめ又元祿
十年丁丑一社の神事法武等宰府本官の例より准て處き
ひ 同帝の勅許を蒙る爾来神威顯赫として靈瑞昭
著たり當社至寶と稱するりの菅神佩せしところの天國
の寶釵なり

福聚山善門院

善應寺と号して同所 一丁より東の方より
志云宗ありて今大日如來を本尊とす
得て寺産若干を賜ふとあり
香燭の料を免しとあり
沖腰懸松堂前より昔 大樹竹枝堂の初 内腰を
上用の善門慈眼の意を
とありとありとあり

普門院



身代觀世音菩薩

當寺に安置せしを傳教大師の儀す

縁起云大永二年壬丑千葉公

三勝の城中

一字の梵刹を圍た此靈像を安置し長賢上人をて始祖

たらしむ

今この普門院を

三勝と云ふは隅田川

流れる荒川の落合の三侯

沈没を其地を築つて

今この普門院を

三勝と云ふは隅田川

善次盛光

後醍醐天皇

往古千葉自胤の臣佐田

不の此靈像の加護

其白段に壞し危難を避

又天文三年國中

創し長賢上人を導師

且雨祖と云ふ

死に死する者少

平愈し病に臨する者

病者と床を等と

延の患なり其後

其の患なり其後

長賢上人睡眠の中

一老翁の来るあり

吾の是夜を畏大士

ありあくの人の代り

疫病を受故に病苦

延の患なり其後

長賢上人睡眠の中

一老翁の来るあり

吾の是夜を畏大士

ありあくの人の代り

疫病を受故に病苦

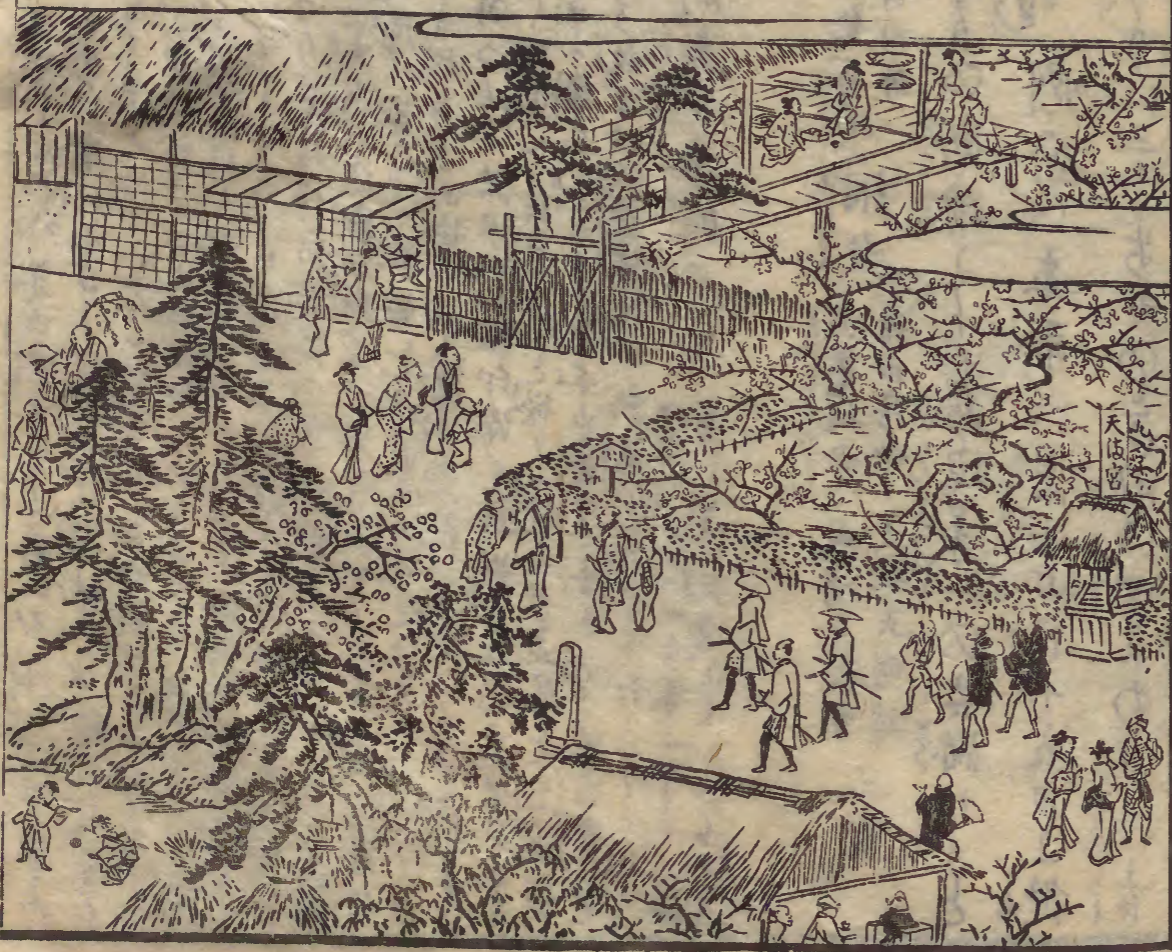
亀戸邑
道祖神祭



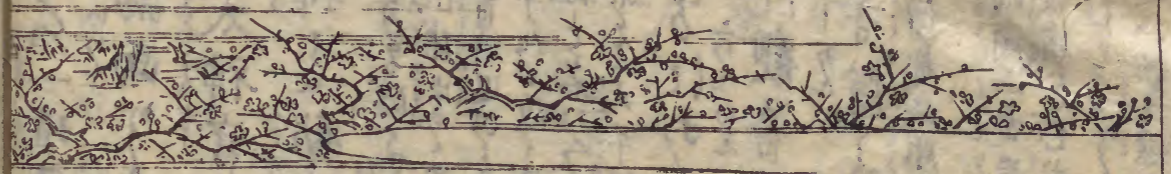
毎歳正月十四日
 此の地を興行と
 此の童子多く
 ありしを菱垣
 造りしにたる
 小舟に又彩色の
 幣帛を建松竹杯
 をも細飾し其中
 夫の宝舟といふ
 を深く織を建
 たるを舟擔月音
 唄の連と此の
 持ち行なり其夜
 童子集會し於
 此の
 恒例とす



如月の花盛
 しの容色
 張の雪衣
 欺き餘香の
 芥子とて四万
 翻まゝ花の
 後実とひそみ
 乾採りし可
 とく常よれ
 を賈人の味
 殊に甘美
 あれはらよ
 花賞する人
 くらと
 花土産
 とと



梅屋敷
 白雲
 舟を
 舟
 梅の
 花
 嵐雪





香取太神宮





亀戸邑の常光寺の江戸
 六阿弥陀回第六番目
 ありき秋二夜の彼岸
 中栗屋の老若衆詣
 群集
 七五

祭礼を行ひてし頃此辺に於て海面ありし其春を流し
其止る地を以て定へしと誓ひたりし其春の止る
しとたり故に今も昔の例より僅の間ありし由十間川あり
て神輿を船に移し後河へ神幸なりし由ありと
東林山寶蓮寺 善藏院と号し其真言宗なりて寺鳴の蓮華

寺に属し本尊の虚空藏菩薩の行基大士の作あり
向山西福寺品川 當寺の吾孺権現の別當寺なり
相傳嘉元元年
癸卯俊鑑法印草創し河の精舎なりて始に相列小田原に
ありしとたり鎌倉北條家の時此比に福とありし

西歸山常光寺 同河一丁あり其の方にあり曹洞派の禪刹
なりて播磨の總泉寺に属し岡山の行基大士中興の勝庵最大
和尚と號す本尊阿彌陀如来の像に即行基大士の作あり
六阿彌陀等 來迎松の佛殿の前より存せり
中古火災の時當寺の本尊大孺
六阿彌陀等あり

龍燈松の同一左の方にあり時として樹上へ
竜燈揚るなり 毎歳二月八月の彼
中糸請方

龜命山慈光院 同河十間川を隔ち向あり當寺も洞泉の

禪林なりて同一く總泉寺に属し永正十一年甲戌葛西出雲守
某の令室慈光院殿草創し河の寺院なり岡山の嵐巖和尚
本尊觀世音菩薩の像に此地より東の方の土中より其現
ありしといひ又境内に安置せる辨財天の像に智證大師の作
ありて葛西出雲守某の尊信ありし靈像なりしなり

吾孺権現社 同河十間川の傍にあり此地を吾孺森又浮洲處
とも號し別當の宝蓮寺なり
本社 祭神 茅槁媛命 一坐

日本書紀神代卷曰日本武尊初至駿河其處賊
陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林
臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獸賊有殺
王之情放火燒其野王知被欺則以燧出火之向燒

吾孀森
吾孀權現
連理樟

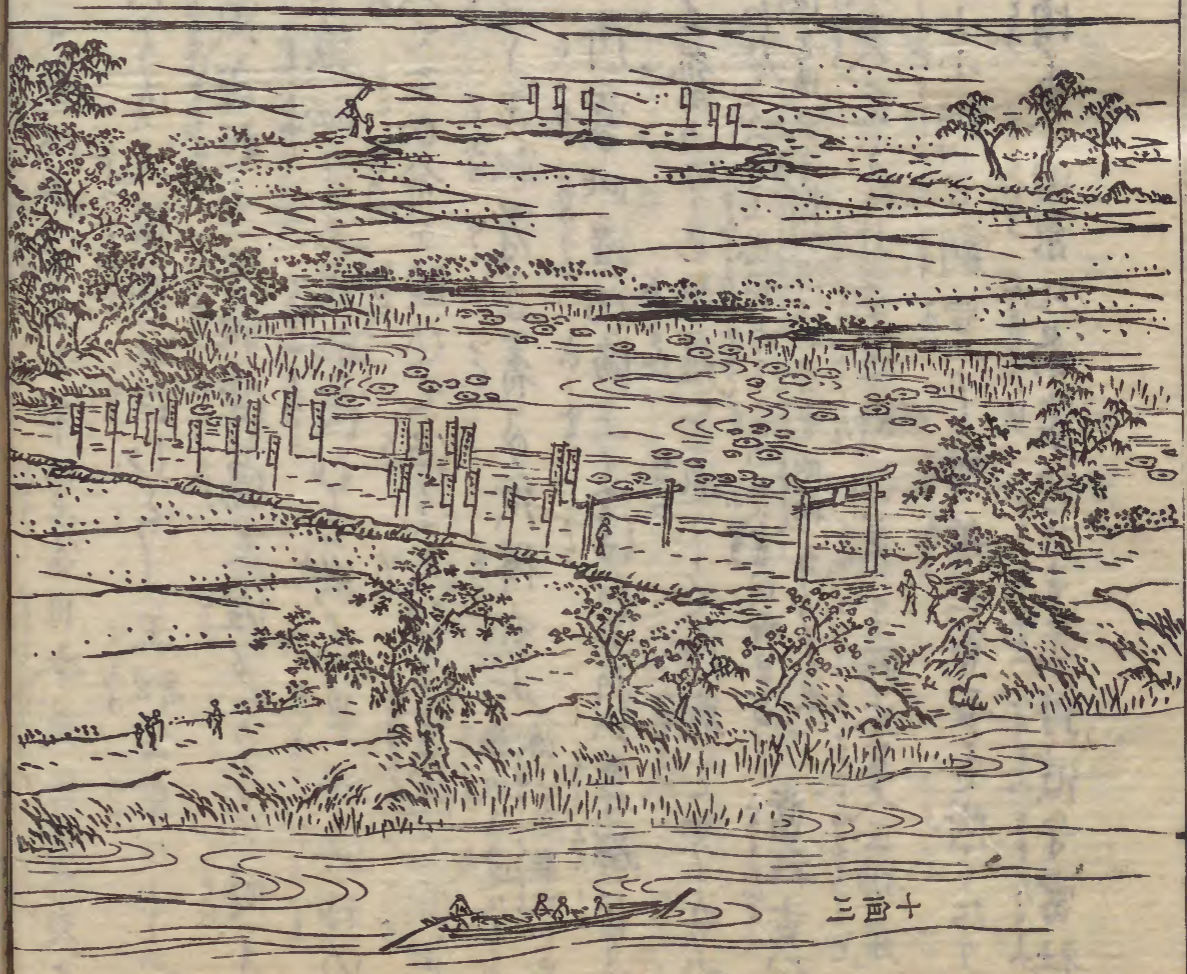
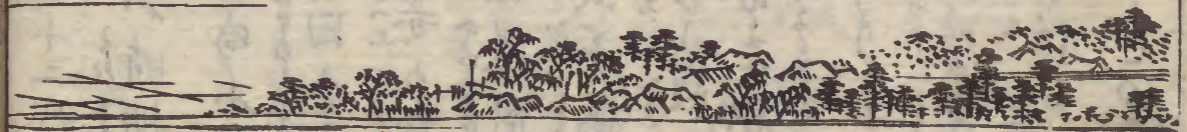
鳥りあぐ

西川まの

波紋

えんせ

月



三画十

入江の

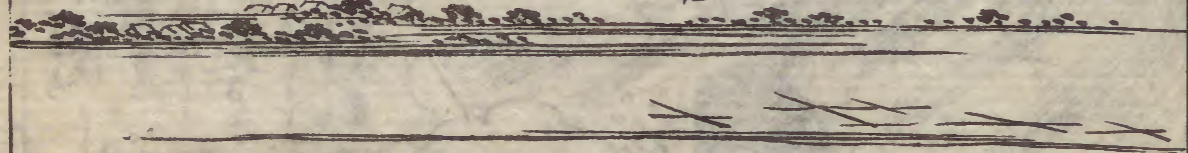
波を

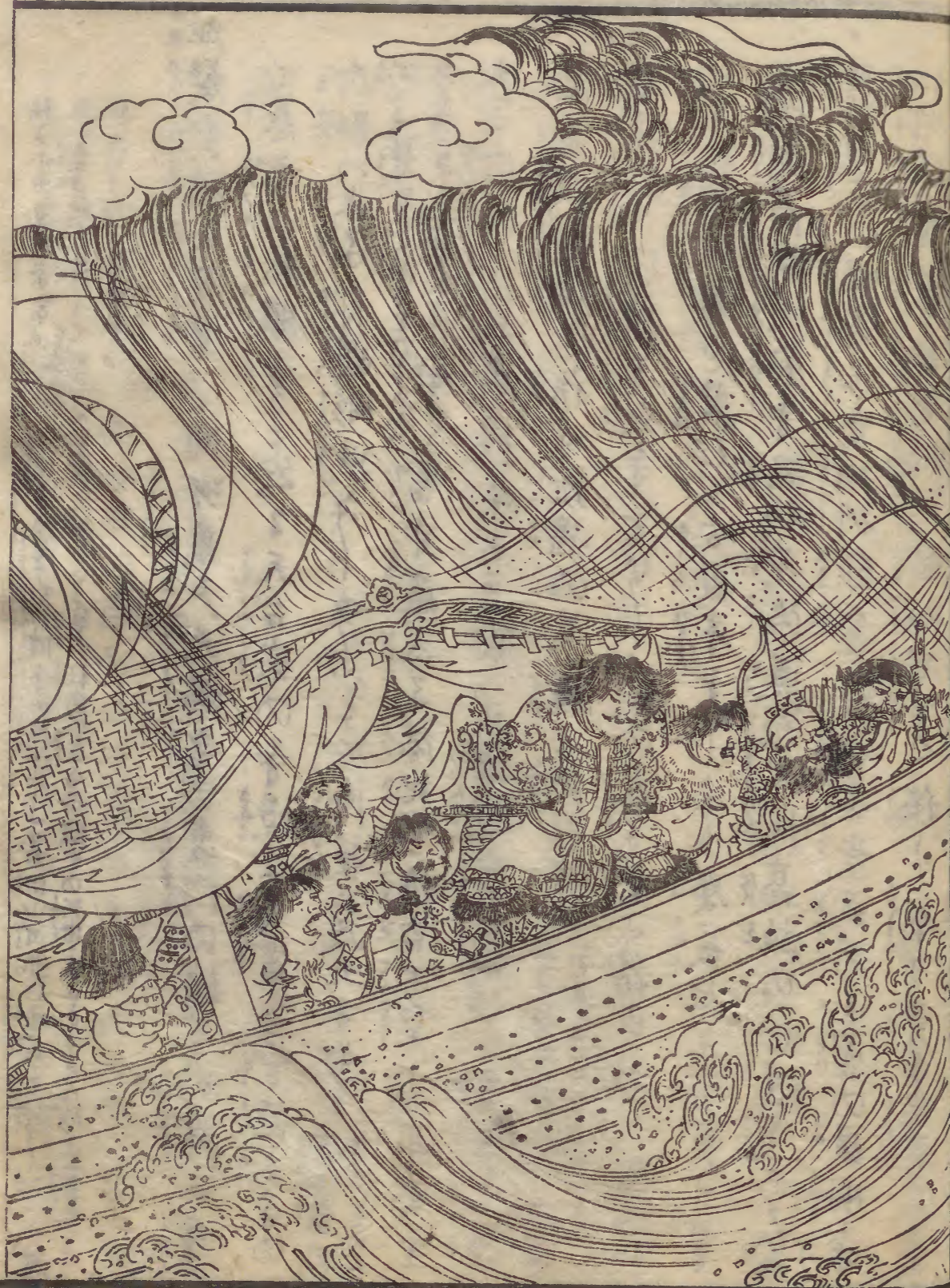
あ

えん

藤原泰光
入江

五三三 とな ちま
此和勢の戸田茂勝
入道のあらせし
とらゆ
吾孀の権とらるる
の身は載たり
向の源ありその
そらにの各妻の
あり
我が東人といはるる
住し
その東人のあ
人あやま





日本武尊東夷征伐
 其海上暴風忽起
 王船漂蕩危殆
 幸得神靈護佑
 乃得脱險
 其時相模國
 其海上暴風忽起
 王船漂蕩危殆
 幸得神靈護佑
 乃得脱險
 其時相模國

按小田原北条家の河内國殺帳より葛山丹波守房成の中葛山丹波村井の地を以て一畝小村
井の龜戸村と稱して則此社の北の人材とりの昔の社地の由丹波守の成地を以てり故に當社を
傳へり

殖髮聖德太子堂

同河内龜戸天満宮の裏門の通り川階に傍

て慈雲山龍眼寺と云る天台宗の寺境に安置して聖德太子の

御影の太子自親彫造よりありと云る御長二尺五寸あり

其の鬘髮を殖さばなりと云る當寺藏太子縁起云推古天皇十一年癸亥

太子御齡二十二歳同年十月廿八日捨毘羅宮よかひて靈本を得

る自親彫像を作り班鳩の夢殿に納りしと云る太子傳曆等此年影像

其後代々の帝王大寺をたり世々の君子堂に移し仍天智帝の

七年に百濟寺を嘗じて安置奉りしより慶長七年壬寅よりある

近の同南都大安寺及び花洛蓮花王院高雄の神護寺あり

豆別田方の般若王寺相列鎌倉のは美堂武列小菅の最明寺

に別後賢菅原寺撰別金胎寺等々移し奉り竟に宝曆十二年

壬午十月武列荏原郡の清谷寺より移し長く當寺に安置

し奉ると云る

當寺の後園萩を多く栽て中秋の頃阿花の時節に壯觀

たり故に吐俗萩寺と字なり

妙見大菩薩 日川階橋を越て向ふ角にあり日蓮宗法

性寺に安んずる本尊の末由詳ならず近世靈驗著しく諸人

常々終に堂前より影向松と号する靈樹あり本尊初に此樹上

降臨ありしと云る故に星降松とも千年松とも呼ぶ之を和の頂

大樹 此地より西へてあり一頃更に境の松と号を揚ひしと云

傳へり

天松山最教寺 同河内三丁よりありを隔て西の方にあり日蓮宗

よりて本尊より釋伽如來の像を安んずる寛永年間延山二十七世通

心院日境上人岡基に當寺に鎌倉將軍惟康親王蒙古鎮制

龍眼寺

庭中萩を多く
栽て中秋の一
奇観たり故に
俗呼ぶ萩寺と
稱せり萬葉集
茅子作り萩
抄鹿鳴草作
續日本後紀に
仁明帝美和
元年八月清涼
殿に内宴と
是を芳賀華
の燕といふ
ありて皇朝



愛され
事やの





押上

最教寺

當寺に蒙古
退治の旗曼
茶羅あり



の旗曼茶羅一ひる所の月蓮上人真蹟の曼茶羅の旗あり
境内にあり本山身延同射の靈像ありと云三澤流初禱の本寺よりて當寺第廿世の
七面堂 住持仙能院日宗より所二百日水行して池の傍に社殿を建てること云
日の丸旗曼茶羅 一幅

竪六尺九寸

毎歳七月十六日
より初め廿二日
まで虫拂とて
七面堂に掲て諸
人より祈り心
月の丸の曼陀
羅の身延山に
あり



斗五尺五寸

兩面之大旗來由記
弘安四年辛巳五月二十一日從大元國蒙古賊船
四時八艘大龍王御旗先立日向親王九人爲祈禱之
其漫荼羅令書此則御旗先立日向親王九人爲祈禱之
大之將至九則異國江追拂給目出度旗成故
武其人數等不發破異國江追拂給目出度旗成故
我其是預給畢
這十面之大旗者一日惟康親王所持之御旗也弘安
四兩五月二日旗一親大國古來八龍王艘人
數二天四萬人也于時親王此旗四方八龍王艘人
角書是爲持九月十三日武災給御旗是也
正應元年十月十三日武災給御旗是也

蒙古退治旗曼荼羅來由
人皇九代後宇多帝御宇弘安
二年庚辰春二月
兼倉少輔元史使杜世忠日本を殺日本

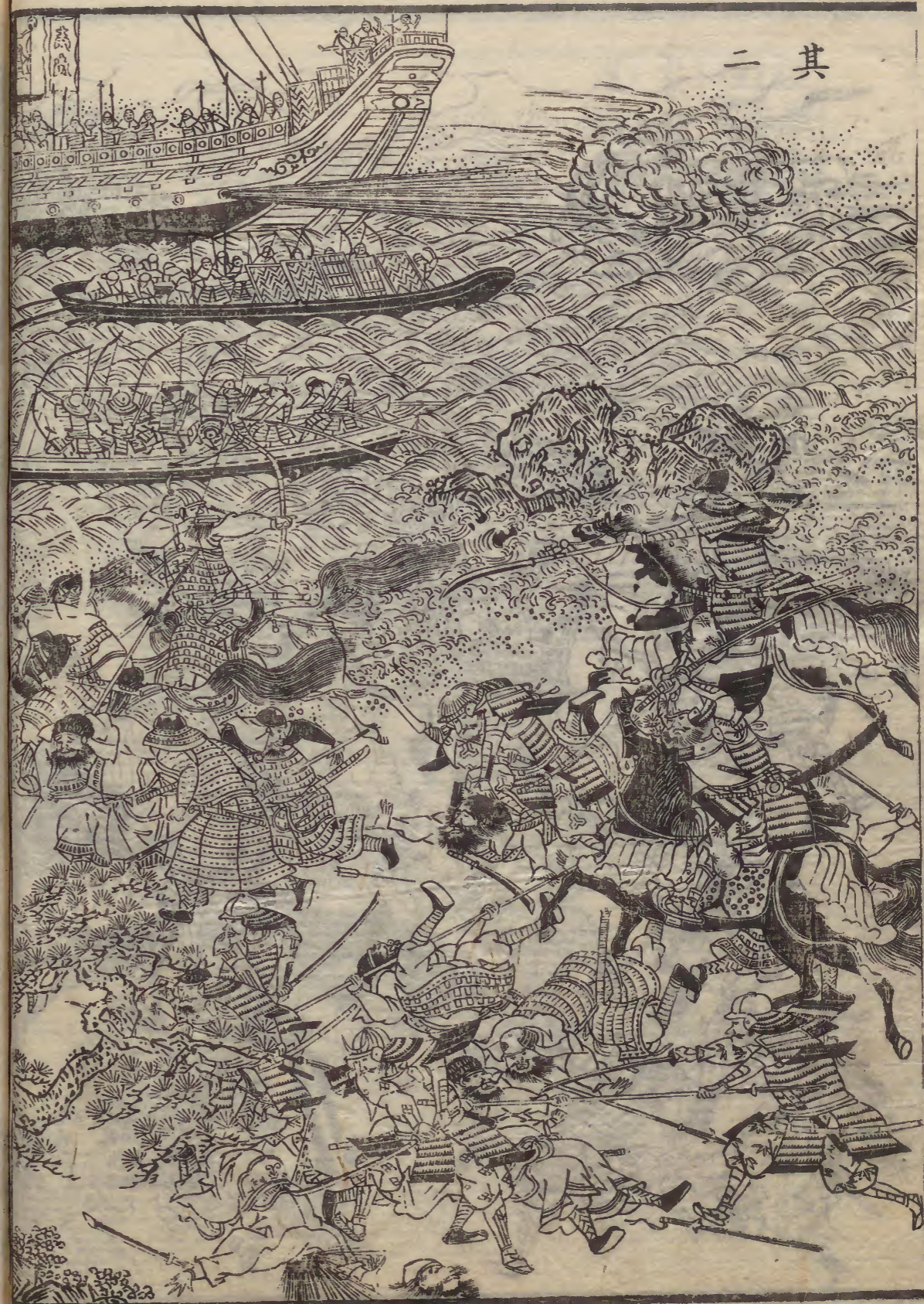
二年庚辰春二月
兼倉少輔元史使杜世忠日本を殺日本
元史日本傳六月海入七月平定
同四年辛巳夏五月
督一未く鎮西一冠一壹岐討馬
の二鳴及ひ筑前肥前入る
元史日本傳六月海入七月平定
天下の人民戰慄

一めて日本を撃つと
東國通鑑卷之三十八高麗記云茶丘所都蒙麗漢四萬の軍
を率て合浦を發し范文虎蜜軍十萬を率て江南を
發し俱一攻嶋會とと太平記
同四年辛巳夏五月
督一未く鎮西一冠一壹岐討馬
の二鳴及ひ筑前肥前入る
元史日本傳六月海入七月平定
天下の人民戰慄
の乃自九列に向つて
宇都宮貞綱を率て先陣の大將
らむ其旗を貞綱と襲へ西海に發向りて其時同辛酉七月
一日より貞綱海濱に至り彼旗を押立てる風俄に起り逆
浪天を浸し賊船漂蕩し或は巖崖に觸て多く壞れ蜜軍
溺死して負腰に葬らるる其數を知ると元師大に敗れ
と擄へする者三萬人悉く是は島嶼首と其餘于閩莫青吳



鎌倉將軍
惟康親王
蒙古夷賊
遷治の因





萬五等を赦して國に還さるるは是れ此事に以て主と爲らん
ありり蒙古の敗卒還るるを得る者僅に此三人のみ
云々の世祖の至元十八年日本を撃兵十餘萬海島に死せしむる者僅に二十人とあるを異称日本傳に二十人の十の字は行なりと云々史に十萬の兵還るるを得る者三人の事ありて三人の字を添たり曰く手附曰く莫青曰く吳萬五等なり以上元史日本傳東國通鑑續資治通鑑綱目大學衍義補五倫書帝王編年集成太平記北条九代記當寺縁起等の 依凱陣の後勸賞して永く此旗を貞綱と稱し貞綱末由を書して身延山に納む然を當寺岡山日境上人等延より携来す永く當寺の什宝ならしむるとなり
寶聚山大法寺 同三丁とあり西のあり日蓮宗より同所法
恩寺に属す當寺は大永六年丙戌創立の林九字ありて岡山の
法恩寺第八世大権院日巧上人なり其頃の法恩寺と号す
今の御廓内平川の地ありと後谷中に移され又元禄年
間今の地と轉りしむるとなり
二十番神堂 本堂の入りあり番神の作り日巧上人の作り日巧寺所六歳の時瘧瘵を病歿せ死せり又母也子はるるに二十番神の靈ありより良事を得て

今將夢想の瘧瘵の守れ當寺よりしむるなり
廣布石 當寺本堂に秘藏に今卵塔の中に其換を置たり貞物の日蓮上人親筆の法每首題を鐫たる石塔なりけく云性衣此靈石龜戸村の地ありと龜戸村昔の鎌倉への海道なり建長五年日蓮大外總綱より鎌倉へ入りあり彼石を運ちて此石を面は法義の首題を書揚り大に廣宣流布の願を誓ひあり後廣布石と号す其後千葉あり相傳りあり千葉石とも移りたり日巧上人は俗性千葉氏なり一處に生れ深度の後當寺を創立し此靈石をもちて安座ありて巧所又自此石面より二十番神の靈ありとあり
常在山靈山寺 二尊教院と号す同所の南法恩寺の北に隣る
淨寂十八檀林の隨一あり本寺阿弥陀如来の像の慈覺大師の作釋迦如来の像の唐佛なり
岡山の念蓮社専譽上人
上人大起和尚と号す中古寺院既荒廢し檀林の統脈絶んとりしを最蓮社親譽俊應和尚深く此事を慨屢
官府に詔して竟貞享二年檀林再興の命を蒙りて往昔の淨域に復せされとも功を後住し讓て武列熊谷寺に隱る故に光蓮社明譽遊安廓栄和尚を中興岡山と号す廓栄和尚ハ一宗



大正
 押上
 法恩寺
 靈山寺



尾師
 中ノ師の辺
 尾師の家
 多くは
 業と
 尾師の

牌を居ると云

三十番神堂

本堂の前左の方にあり関東古戦録と云る所の云傍に三十番神の堂と云る所の密後所よりと又北条五代記小田原実記等の書に北条高北条家とあり里見義弘より永く豊嶋郡の地を知行せんとて見方のとより番神堂の前より神を香けり思ひ定ぬるに再々之と誓約ありしに記より其区に今の所城内

平河の地ありしなり

當寺往古今の御城内平河よりありて本住院と号せしなり

所収後帳に本住院寺修し三田内為成分の地を法思寺と改し其後世のものと

階とあり別本住院の本住院の事を云々なり

とえたり遙く天正の後柳原の田一移され其後谷中清水坂の地へ

轉せしれ元禄の初今の地へひれたりしなり

是乃ち平河より遠き坂へ移りたりしなり

業平天神社 中の郷南藏院といつる天台宗の寺境あり傳い

在原業平朝臣の霊を鎮ると云

の舟のありの浦より覆り溺死し乃里民家より葉こめたり故郷の舟の

と云わり其在所と今も業平村と云又江戸藤子といふ冊子より成平に作り相撰

とて紫の一本より業衡より作り武丈と云の類ひ夥多しといふれ也

中郷の領今の地より種々なり又南郷の領中郷の領業平假住の地あり

按之當社の儀選給くとて洋より南郷の茶店に城の二吉野の里

神の相殿に業平の霊と菅村とを合せたりされ此處も隅田川の流

業平天神といれりなるなりとあり此儀の如く伊勢宿を作りたりとの

中郷八幡宮 同所南の方荒井町あり南番湯町天台宗泉

龍寺奉祀と相傳ひ文明七年乙未の鎮坐なりとい

大六天祠 同北より隣り大川踏普賢寺別當なり當社由文明五年

癸巳の勸請なりと云傳ひ

多田薬師堂 同所大川邊にあり玉島山明星院東江寺と

号し山より屬せ 惣門より掲る所の玉島山の額に韓人雪月堂

李三錫の筆なり奉る薬師佛の像は惠心僧都の作なり

多田満仲公の念持佛なりとい

相傳ひ村上帝御宇天徳二年撰別多田郷に一字の伽藍を



秋葉社の毎年
十月十六日
ありて賑はり
たのやくし
多田薬師堂



中之郷

さうら井

世の

中の

蝶々

とちうれ

うくも

あま

西山

宗周



造管ありて沙羅連山石峰寺と號し此本寺を安置之其
 後文永の頃兵火に罹りて諸堂悉く回祿に依て一山の丈
 衆られを悲む此本寺を石函に収め山中に埋め奉り惣
 夫より後星霜を移り慶長元年郷民等沙羅山中に於て
 此石函を穿出せり蓋し沙羅連山石峰寺藥師の銘あり郷
 民等奇異の思ひをこれ一處に一字を宮と是を安と同年
 其庵主宗玄と云者に本寺を告めありて京師五條の因幡
 堂に暫く安置し又五條の橋詰東の方若宮八幡宮の辺
 に堂舎を建て石峯寺と号せ寶永の頃彼寺に黄檗の子
 呆和尚深草に移り其時故ありて本寺藥師佛を當寺に
 安置せり

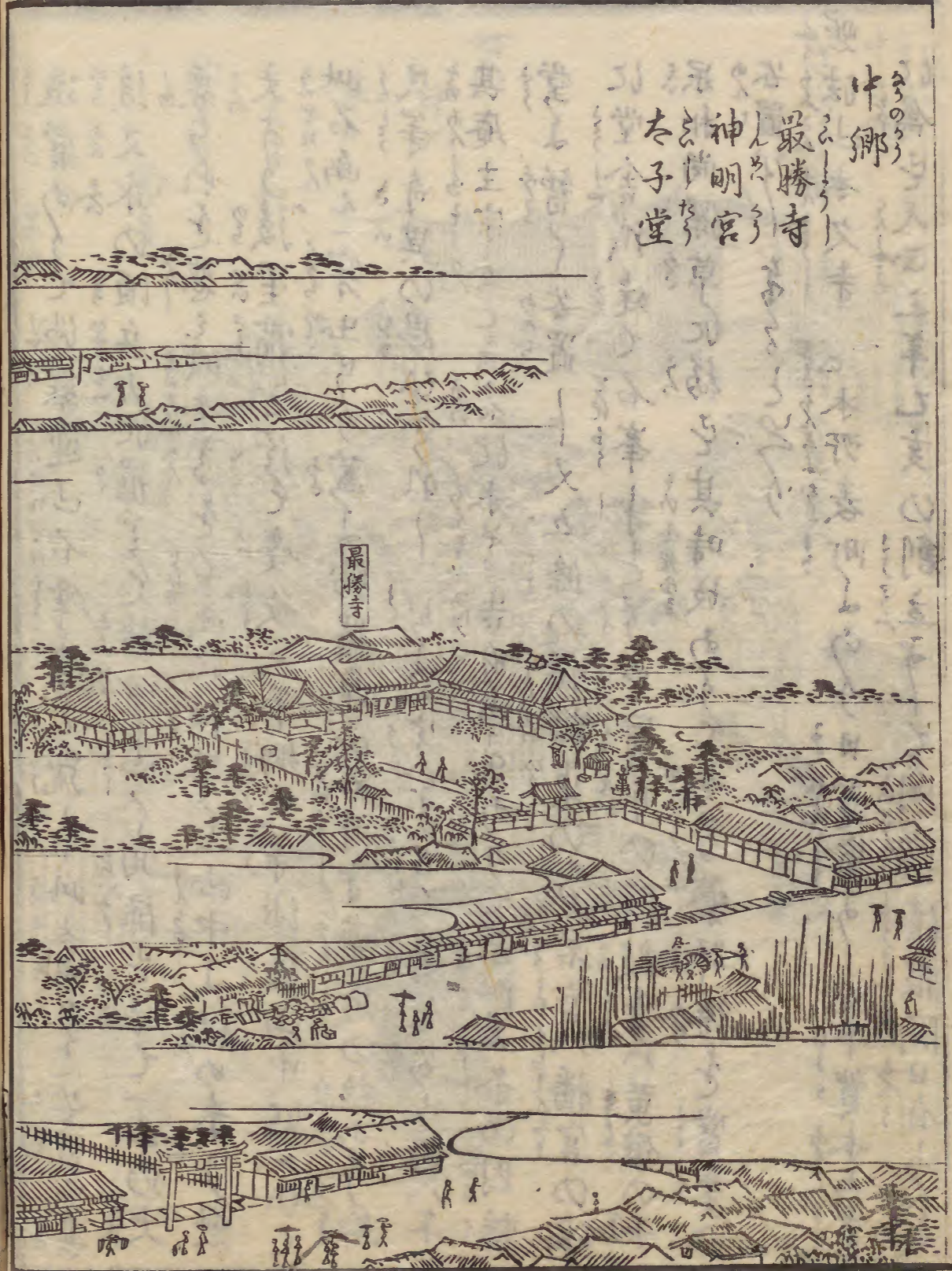
照法山本久寺

北本所表所あり

日蓮宗あり

平賀本土寺

に属す天正二年乙亥の創立ありて岡山清眼院日有上人と



中郷
 最勝寺
 神明宮
 左子堂

号と當寺に安置する所の宗祖大士の像は日朗所御首を彫刻
一 日法所全體を造り添られしといひ體中三寸に六寸の首
題の札を収めたり日朗からいひ日法等の真跡なりといひ
此御影始谷中感應寺に安置と元禄四年彼寺改宗の時
檀家より八牧弥宗と云つる有信の人ありし此影像あらひに
之光天子大黒天等と其家よりつて宗教ありしと後當
寺に安置ししなりといひ境内安垂の七面大明神は花洛村雲の
尼御所隨龍寺殿仕女數馬女感得の靈像なりと故ありて當寺
に安垂ししとあるといひり
正覺山妙源寺 同所北本所番場所にあり日蓮宗よりつて下
野佐所妙頭寺に屬と建武年間草創よりつて中老僧天目
上人用山たりといひ總門の額正覺山の三大字ハ平林淳信の
筆跡よりつて清日居と記してあり

牛寶山最勝寺 明王院と号と同所表所にあり天台宗よりつて
東叡山に屬と本寺不動明王の像ハ良辨僧都の作り當
寺ハ牛御前の別當寺よりつて貞觀二年庚辰慈覺大師草創
良本阿闍梨岡山たり寛永年間 大樹 此辺津遊獵
の頃屢當寺ハ 入泐めせられしより其頃の假の所殿杯
堂構りしと並れたりといひり 今由所殿杯と稱する由ハ
山王権現を觀清と
牛嶋神明宮 同所より並の相傳ハ貞觀年間の造座なりと別
當を神宮寺と稱して最勝寺よりつて兼帶と 此戸名所記云安徳帝の
壽永年間本所の郷民
夢をうり伊勢大市宮虛空よりつて大光月の内に微妙の御声と我いし土安徳天皇の常
亮海と云はれ奉侍壽量居の文を唱へ我いらん伊勢の大市宮なりといひり
伊勢の御神を勧誘ししとあり
因よ云牛嶋北条家の限懐中ハ戸牛島四ヶ村とありて當所ハ此郡の所所の中
より今由本所中の所の辺より須後とての邊とありは戸の古果に回向院の邊ハ牛島と記して
あり
太子堂 同所よりあり天台宗如意輪寺に安置と本寺の聖徳太子

の像（まが）十六歳にありてその時（とき）自親遠（みかたのちか）りありてなり當寺（あたりのでう）の傳和（でんわ）
 天皇（てんかう）の嘉祥年間（かしょうねん）慈覺大師（じかくだいし）東園遊化（とうえんゆうけ）の頃（ころ）の創建（けんけん）ありて帝百
 畝（あ）の水田（みづゐ）を寄附（よきまけ）ありて天文（てんぶん）の頃（ころ）此（こゝ）地（ち）稅融（ぜいじゆう）氏の災（わざ）にありて
 とはる太子（たいし）の靈像（れいざう）の自火燭（みづか）を遺（のこ）るはひて恙（あや）なかりありて
 江戸（えど）名所（なしょ）評（ひやう）よりとるなり



高野山 自火燭の遺るはひて恙なかりありて
 江戸名所評よりとるなり

